

第2回 大阪芸術文化交流シンポジウム
—大阪から「美術/アート」を拓く—
実施（調査）報告書

令和2年（2020）年2月、大阪アーツカウンシル

目次

1. 実施報告書発行について.....	2
2. シンポジウム概要.....	3
2-1 事業概要.....	3
2-2 登壇者.....	4
3. シンポジウムの記録.....	5
はじめに.....	5
第一部「大阪府市補助金・助成金事業における「美術/アート」2018-19年度」.....	7
第二部「美術コレクションから考える大阪」.....	20
第三部「大阪から「美術/アート」を拓く」.....	34
第四部「大阪の美術を拓く」.....	45
4. 参加者アンケート.....	57
4-1 アンケートについて.....	57
4-2 アンケート結果.....	59
5. 資料.....	64
5-1 広報（チラシ）.....	64

1. 実施報告書発行について

この報告書は「第二回大阪芸術文化交流シンポジウム-大阪から「美術/アート」を拓く-」の実施を報告するものです。

大阪アーツカウンシルは、大阪府市文化振興会議の部会として文化施策の評価、企画の提案に関する調査並びに文化に関する情報収集を行っています。このシンポジウムは、大阪アーツカウンシルの公開調査事業として2020年1月25日に実施しました。そこでは、大阪府文化振興補助金と大阪市芸術活動振興事業助成金における「美術/アート」の採択事業の傾向と、大阪府と大阪市の美術行政の経緯、ミドルキャリアの美術関係者の活動が紹介され、さらに互いに意見を交わしました。

そのようなシンポジウムの実施内容を収録した本報告書は、大阪の美術振興のみならず、全国の芸術文化に携わる人々に、美術やアートを窓口とした地域文化振興の在り方を考える参考となるのではないのでしょうか。

2025年の大阪・関西万博の開催に向けて、大阪という都市は大きく変わろうとしています。そのような変化の時代に、創造性を育み、心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができ、心豊かな社会を形成することができる芸術文化は、府民・市民にとって重要な役割を担うといえるでしょう。

最後になりましたが、このシンポジウムに登壇しいただいたみなさま、開催に尽力して下さったみなさまに、この場を借りてお礼申し上げます。

大阪アーツカウンシル

統括責任者

中西 美穂

※本報告書における肩書等は、シンポジウム開催時のものです。

2. シンポジウム概要

2-1 事業概要

名称：**第2回 大阪芸術文化交流シンポジウム ～大阪から「美術/アート」を拓く～**

開催日：2020年1月25日（土）

開催時間 13:00-17:50

会場：I-site なんば（大阪府立大学）カンファレンスルーム

参加者：60名（予約20名）

参加費：無料

主催：大阪アーツカウンシル

※大阪アーツカウンシルは、大阪府市文化振興会議の部会として、文化施策の評価、企画の提案に関する調査並びに文化に関する情報の収集及び分析を行っています。このシンポジウムは、大阪アーツカウンシルの公開調査事業です。



会場風景

2-2 登壇者

○総合司会：中西美穂（大阪アーツカウンシル統括責任者）

第Ⅰ部

○話題提供：山中俊広（インディペンデントキュレーター/大阪アーツカウンシル委員）

江藤まちこ（大阪アーツカウンシルアーツマネージャー）

野添貴恵（大阪アーツカウンシルアーツマネージャー）

第Ⅱ部

○司会：小吹隆文（フリーライター）

○登壇者：菅谷富夫（大阪中之島美術館準備室室長）

中塚宏行（大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課研究員）

第Ⅲ部

○司会：中西美穂（大阪アーツカウンシル統括責任者）

○登壇者：後藤哲也（グラフィックデザイナー/近畿大学文芸学部准教授）

シーズン・ラオ（アーティスト/UNKNOWN ASIA 審査員）

宮本典子（一般社団法人日本現代美術振興協会事務局長）

木坂葵（おおさか創造千島財団事務局長）

第Ⅳ部

○司会：中西美穂（大阪アーツカウンシル統括責任者）

○登壇者：木坂葵（おおさか創造千島財団事務局長）

後藤哲也（グラフィックデザイナー/近畿大学文芸学部准教授）

小吹隆文（フリーライター）

シーズン・ラオ（アーティスト/UNKNOWN ASIA 審査員）

菅谷富夫（大阪中之島美術館準備室室長）

中塚宏行（大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課研究員）

宮本典子（一般社団法人日本現代美術振興協会事務局長）

山中俊広（インディペンデントキュレーター/大阪アーツカウンシル委員）

3. シンポジウムの記録

13:00～

はじめに

中西 美穂： 第2回大阪芸術文化交流シンポジウム、【大阪から「美術 / アート」を拓く】を始めます。司会を務めます、大阪アーツカウンシルの中西美穂です。宜しくお願い致します。

芸術に関わる人の声を聞き、交流し、新たに出会い、表現が拓かれることを目的として大阪芸術文化交流シンポジウムを開催します。第2回の今回は「美術 / アート」に焦点をあてます。美術という言葉は近代以降に誕生しました。その、美術の公的文化的支援の最も大きな形が美術館です。大阪では1936（大正11）年に大阪市立美術館が開館して以来、複数の美術館施設等が設置され、多くの貴重な美術作品を収集し、収蔵し、展覧会等を通して現在に至るまで、大阪という都市に「美術」を顕在化させてきました。

一方で美術館を持たない大阪府は、大阪府立現代美術センターを設置し、大阪トリエンナーレの開催を通して大阪府21世紀コレクションを形成し、2000年以降に日本の市民権を得る、「アートセンター」や「トリエンナーレ」という言葉を先駆的に使った美術施策を行ってきました。

これらの美術館やセンター等の存在は、多数の美術科や芸術団体、愛好者——ここにいらっしゃる方すべてだと思いますが、そういった方々が大阪で学び、暮らし、働き、活動してきたからこそその結果であると言えるでしょう。

本シンポジウムでは、そのような「美術」を「アート」とともに併記し、同時代性を前提として大阪府市の美術施策の現在について聞くとともに、大阪のアートにゆかりのある、国際的な活動を展開する企画者の発言を起点に、大阪から「美術 / アート」を拓く一つの機会としたいと思います。

第2回目の今回は昨年度から二つのバトンを引き継いでいます。一つは演劇をテーマとした第1回シンポジウムからの「アーカイブ」、もう一つは昨年度末に「大阪の文化振興に関する提案」を大阪アーツカウンシルから発信しました中にある「ミドルキャリア」というバトンです。

一つ目の「アーカイブ」は今回の「コレクション」というテーマに引き継がれています。前回の演劇シンポジウムでは、演劇の表現者たちが活動が続いていくためには、過去にどのような活動があったのかを知ることができるようなアーカイブが必要だという意見がありました。どのような演劇がいつどこで行われて、誰が関わ



中西美穂

っていて、どんな批評が生まれたのかといった情報の蓄積です。どのような芸術分野にも、そのような蓄積が必要と言えるでしょう。美術にも展覧会やアートプロジェクトのアーカイブは必要です。また、美術作品というのは、美術家はその時代に何を見て何を感じたかが表現されており、その作品を集めていくこと、コレクションしていくことも一つのアーカイブ行為だとも言えます。

そう思って大阪の美術事情を見たときに、大阪市には中之島美術館が開館します。その美術コレクションに多くの市民がアクセスできる環境が整い、また新たなコレクションが形成されていくことも可能な状態になるということです。

翻って、大阪府も美術コレクションを持っています。大阪府には美術館がありませんので、大阪府立江之子島文化芸術創造センターというアートセンターでコレクションが管理されています。アートセンターは通常、美術館が行う美術作品の研究や普及は行いません。したがって、現在、同センターでは研究を通した普及ではなく、「活用」として使うことに力点が置かれています。

美術作品は「モノ」であり、劣化してきたら修復が必要になります。また価格は変動制なので、研究によってたゆまぬ価値付けが欠かせません。しかし、もしかしたらそれが十分にできていない状況が続いていたのかもしれないと考えています。

私は大阪府に生まれ、大阪府に育ち、大阪市在住ですが、一人の美術ファンとして、そのことを十分に考えてこなかったなと反省しているのが、正直なところです。コレクションは大阪府民のものだと思うので、府民一人でもできることはあったと思っています。例えば、中之島美術館の開館前に、Wikipedia にいろいろと中之島美術館にある作品について書き込んでみようというワークショップが図書館で行われていて参加しました。それによって、「私も何かできた」と感じることができました。また、大学の美術を研究している人たちがそれぞれの形で研究して論文を書くことで残っていきます。実はいろんなことができるんだということを考える時間さえなかったのですが、今回、このようにシンポジウムを開催して考える機会が持ててよかったなと思います。

もう一つは「ミドルキャリア」です。これは 30-40 代のことです。元気いっぱいだが足元が定まらない若手の思い。一方で「昔はよかったな」という、私も含めた 50 代以上の人たちの思い。その両方の間に立ち、両方のことを知っていながら仕事ができるというのが「ミドルキャリア」だと思います。ちょうど就職氷河期のロスジェネとかぶる世代ですが、その方たちが元気にしっかり仕事ができるので、これからはミドルキャリアのみなさんが、発言できる機会をもっと作っていく必要があると思っています。

たくさんのお手配資料を見てもらってもわかる通り多岐に及んだ内容になっております。情報盛りだくさんかもしれませんが、それもうれしいことだなと思います。長時間にわたりますが、一緒に聞いていただき、この場を作っただけであればと思います。

13:10～

テーマ：

第一部「大阪府市補助金・助成金事業における

「美術/アート」2018-19 年度」

○話題提供

山中俊広（インディペンデントキュレーター/大阪アーツカウンシル委員）

江藤まちこ（大阪アーツカウンシルアーツマネージャー）

野添貴恵（大阪アーツカウンシルアーツマネージャー）



写真左より：野添貴恵、江藤まちこ、山中俊広

山中俊広： ただいまよりシンポジウム第1部【大阪府市補助金・助成金事業における「美術 / アート」2018-19 年度】を始めます。進行は、大阪アーツカウンシル委員の山中と、アーツマネージャーの江藤、野添の3名で行います。どうぞよろしくお願いいたします。

第1部では、大阪府市の補助金・助成金から「美術 / アート」に該当する事業の、ここ2年間の状況について取り上げます。現在、大阪アーツカウンシルでは、体制が変わった昨年度から、府市合わせて年間約180件ある補助金・助成金の採択事業を、委員とアーツマネージャーが手分けをして、出来る限り全て視察に伺っています。発表は、私たち大阪アーツカウンシルの視察者各々が作成した報告書を基にしています。

まず大阪府市の補助金・助成金の仕組みの概要について説明します。それぞれの採択事業の中から「美術 / アート」に該当する事業を取り上げ、私たち視察者の視点からこの2年間の「美術 / アート」事業の特色について説明します。本発表の趣旨は、みなさんに大阪府市の補助金・助成金の仕組みについての理解・認識を深めていただくこと、昨年度と今年度の2年間の採択事業の傾向から、大阪の「美術 / アート」の特色をみなさんと一緒に捉える機会になればと思っています。そして、今後、府市の補助金・助成金へ「美術 / アート」分野の応募者や応募内容が広がっていくための情報提供として、またこの後のシンポジウム内での議論のための話題提供として、第1部の役割を考えています。まず大阪府・大阪市それぞれの補助金・助成金の全体の概要について説明します。

江藤まちこ： 大阪府市の補助金・助成金の制度は3種類あります。大阪府は「大阪府芸術文化振興補助金」と「輝け！子どもパフォーマー事業補助金」の2種類、大阪市は「大阪市芸術活動振興事業助成金」の1種類ですが、それぞれに特別助成と一般助成があります。大阪府の2つの補助金は1月末まで応募を受け付けており、資料を配布していますので、ご覧ください。大阪府は、2020年度の特別助成と2020年度上期の一般助成事業の応募期間は来月を予定しています。



江藤まちこ

それぞれの制度が何を目的としているのか、対比してお話しします。まず、「大阪府芸術文化振興補助金」は、「府民に優れた芸術文化の鑑賞機会などを提供し」とあるように、府民が芸術に触れる機会の創出に重きを置いています。「子どもパフォーマー事業補助金」は子どもたちが主体となって活動することが中心となっています。大阪市の助成は、子どもに限らず文化活動を支援することと、大阪市全体の文化水準の向上を目指すものとなっています。

次に、それぞれの応募資格と事業の対象者についてご説明します。大阪府の「芸術文化振興補助金」に応募できるのは府内の団体に限られます。「子どもパフォーマー事業補助金」は団体だけでなく個人も応募資格があります。事業のターゲットは「芸術文化振興補助金」は「子どもを含めた府民」とあり、大人だけの活動は対象になりません。「子どもパフォーマー事業補助金」は概ね6歳から20歳までの府内の子どもと、大阪府の補助金制度はいずれも次代を担う子どもに焦点が当てられていることが大きな特徴です。大阪市の助成金の応募資格は個人・団体とありますが、大阪市内で活動を行う事業であれば大阪府に拠点があるなしに関係なく助成の対象に含まれます。

補助 / 助成の対象となる事業や分野について説明します。「芸術文化振興補助金」は、1.舞台芸術公演やワークショップなどの事業 / 2.出版や文学賞などの文化普及事業 / 3.美術作品の展示やワークショップなどの美術振興事業 / 4.その他、芸術文化の振興を図るため適当と認める事業舞台芸術公演やワークショップなど…と4つの事業を示していますが、いずれも次世代育成が主たる目的です。「子どもパフォーマー事業補助金」もどちらも、文化の担い手育成の長期的な視点が垣間見えます。事業分野は申請時に事業者が選ぶ選択肢になっているものです。

次に、大阪市の助成金の対象になる事業分野として挙げられているものは次の6種類です。1.音楽（洋・邦オペラ等） / 2.演劇（現代・ミュージカル人形等） / 3.舞踊（邦・バレエ現代民族等） / 4.古典芸能・大衆芸能・民俗芸能（能、狂言、歌舞伎、講談、浪曲、落語等） / 5.美術・写真・書道・陶芸・工芸（インスタレーション、メディアアート含む） / 6.映画。具体的な活動は、公演・展覧会ワークショップ芸術祭（映画祭を含む）・アートプロジェクトで、大阪市内で実施することが条件です。公演、展覧会などのほか、特別助成ではシンポジウムやアーカイブも対象になっています。

ではどのくらいの金額の補助があるのかということですが、大阪府の「芸術文化振興補助金」は最大100万円、「子どもパフォーマー事業補助」は最大30万円です。対象期間は4月から翌年3月末までの1年間です。

大阪市は助成金に特別 / 一般の 2 種があり、助成金額と対象期間に違いがあります。特別は最大 400 万円、一般は最大 20 万円です。一般は半期に分けて対象期間とし、年に 2 度募集があります。

応募・採択件数の状況です。ここ 2 年は府市合わせて 260 件弱の事業応募があり、約 180 件の事業を採択しています。大きな変動はありませんが、前年度大阪市の特別助成の応募が比較的目立って増加しています。

【図 1】

【図 1】

大阪府市補助金・助成金事業内の 「美術/アート」の採択件数

		2018年度		2019年度	
		採択件数	アート・展示の 採択件数	採択件数	アート・美術の 採択件数
大阪府芸術文化振興補助金		17	2	16	3
輝け！子どもパフォーマー事業補助金		16	2	18	1
大阪市 芸術活動振興事業助成金(特別)		22	4	28	7
大阪市 芸術活動振興事業助成金(一般)	上期	46	3	54	5
	下期	76	4	70	9(1)
合計		177	15	186	25

2018年度の採択件数は「大阪アーツカウンシル活動報告2018/4/1-2019/3/31(発行:2019年3月)」を参照
※ ()内の数字は採択後辞退した事業数

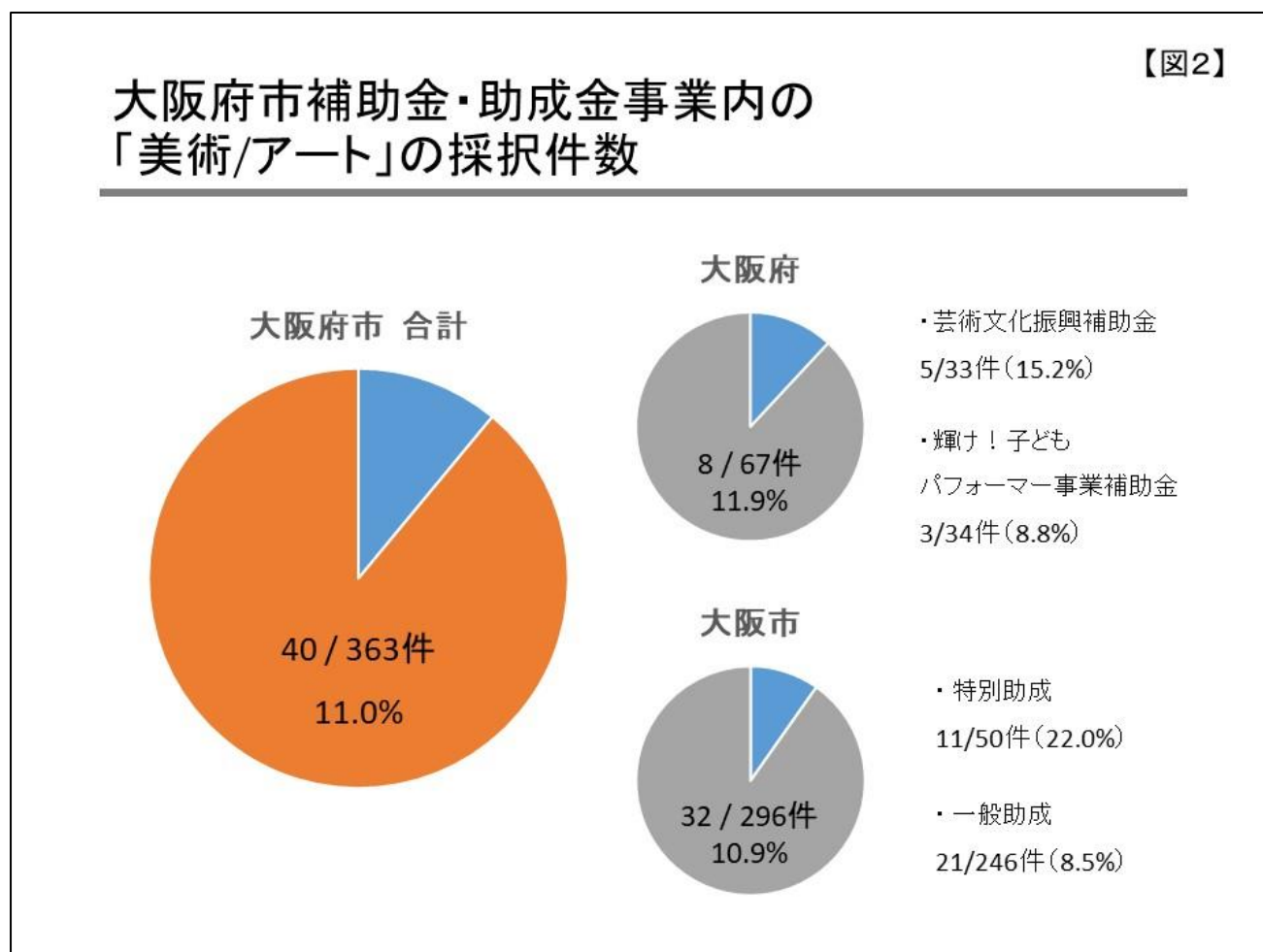
ちなみに、府市の事業連携により、同一事業がこれらの補助金・助成金に重複して応募ができないようになっています。今回採り上げますのは、これらの中から「美術 / アート」の事業です。

次に、大阪府市補助金・助成金事業全体の中から「美術 / アート」についてお話しします。この後、大阪府市補助金・助成金事業の中から「美術 / アート」に該当する事業を抽出してお話しします。対象となる事業・分野のうち、大阪府の 2 つの補助金制度については事業者が事業計画書において、「アート」分野を選択されたものとしています。また、「その他」の事業の中から「美術 / アート」の要素があるものも加えました。

大阪市は事業実施計画書において、事業者が「展覧会、ワークショップ、芸術祭、アートプロジェクト、アーカイブ制作」を選択したものの中から「美術 / アート」に該当する事業をまとめました。

この基準で「美術 / アート」に該当する事業を見ると、この2年間で合計40の事業がありました。2年間の推移を見ると、今年度の大阪市の助成金採択数について昨年度と比べて「美術 / アート」が倍増しています。「美術 / アート」の分野に府市の補助金・助成金制度の周知が広がったといえるのかもしれません。このように多様な表現や多様な手法が採択されていることは、府市の補助金・助成金に幅があり意義のあることだといえるでしょう。

2年間の大阪府市の全事業における「美術 / アート」の事業比率をみると、「美術 / アート」の比率は11%です。ちなみに最も多い事業分野は演劇で、全体の4割弱を占めますが、「美術 / アート」も増加傾向にあります。補助金・助成金の種別にみると大阪市の特別助成で割合が高い、規模の大きな事業の申請が多いことが伺えます。【図2】



以上を踏まえ、次に「美術 / アート」の事業の中身、特色についてお話しします。

山中： ここ2年間の大阪府市の補助金・助成金事業における「美術 / アート」の特色について見ていきます。先ほどの基準で、府市の計363件の採択事業の中から、40件を「美術 / アート」の事業として抽出し、そのうち実施された、または現在実施中の39件の事業を、6種類の特色に分類しました。単一の事業で複数の特色をもつものもあります。

「場 / コミュニティに根ざした活動」

まず、一つ目の特色として「場 / コミュニティに根ざした活動」という視点がありました。年 1 回など、同じ地域や会場で定期的かつ継続して実施している活動、特定のコミュニティの人々を対象に行われる活動、地域の性質や個性を「美術 / アート」を通じて考察している活動、これらの 3 つの傾向が見られる事業です。これらの活動には、広義のコミュニティアートとして、それぞれの活動範囲において社会課題を考える目的も含まれ、府民市民の一般層の参加を促進できる、最もスタンダードな活動形式と捉えることができるでしょう。この特色には以下の 15 の事業が該当していますが、6 種類の特色の中では該当する事業が最も多くなっています。昨年度は 6 つの事業が、今年度は 9 つの事業が該当しました【表 1】。府市の補助金・助成金 4 種類の分布も、全てにわたって実施されています。

【表 1】

1. 「場 / コミュニティに根ざした活動」

◇2018 年度

- （一社）タチヨナ「庄内つくるオンガク祭」（府・芸文振）
- ユメハネ実行委「ユメハネフェス 2018」（府・子）
- 豊能町プロジェクション・マッピング体験実行委
「第 3 回豊能町プロジェクション・マッピング体験」（府・子）
- NPO こえとことばとこころの部屋「釜ヶ崎芸術大学・大学院 2018」（市・特別）
- 7 つの船実行委員会「入船」（市・特別）
- みてアート実行委「みてアート 2018（御幣島芸術祭）」（市・一般）

◇2019 年度

- （一社）タチヨナ「庄内つくるオンガク祭 2019」（府・芸文振）
- 豊能町プロジェクション・マッピング体験実行委
「第 4 回豊能町プロジェクション・マッピング体験」（府・子）
- NPO こえとことばとこころの部屋「釜ヶ崎芸術大学・大学院 2019」（市・特別）
- みてアート実行委「みてアート 2019（御幣島芸術祭）」（市・特別）
- ひというプロジェクト「HOSPITAL ART in Gallery II（病院のあなたも一緒につくる・みんなで見る）」
（市・特別）
- MASH 大阪「U=UPROJECT-ART・HIVEXHIBITION&DIALOGUE」（市・特別）
- IWF 実行委員会「ワークショップ検索サイト DOORS・アーカイブ」（市・特別）
- アートコネクト実行委「大阪御堂筋アート 2019」（市・一般）
- 音楽と演劇の年賀状展「音楽と演劇の年賀状展 10」（市・一般）

この中から、具体的に2つの事業をご紹介します。まず今年度を実施された「みてアート 2019（御幣島芸術祭）」を取り上げます。こちらは大阪市西淀川区の御幣島駅周辺を中心に、2013年から毎年秋に開催されています。かつての公害訴訟の和解金を基に設立されたあおぞら財団が、当初から事務局を担い、毎年少しずつ規模を広げて開催している事業です。2016年度から大阪市の一般助成を受け、今年度は初めて特別助成を申請し採択されての開催となりました。これまでは区内の施設や店舗を会場に、運営者とのご縁のあるアーティストを招いての展示やワークショップを多数開催することによって、アートでまちの賑わいや区民コミュニティの活性を目的とした、至ってスタンダードなアートプロジェクトだったように思います。

今年度は規模拡大の目玉として、地元の町工場や企業とアーティストのコラボレーションによる企画展が初めて開催されました。11組のコラボレーションがあり、その多くは企業からアーティストへの素材提供という作りの中に、企業からの積極的な技術提供、共同制作の要素が強い作品が随所に見られました。これまで協賛金での支援が中心だった地元企業との関係がより深まったことと、アートプロジェクトとして、町工場の多い西淀川というまちの個性を、しっかりと企画に取り込むことができたターニングポイントになる今年度の事業であったと思います。来年度以降の展開も楽しみな取り組みでもあります。

野添貴恵： 次に、今年度実施された MASH 大阪

「U=UPROJECT-ART•HIVEXHIBITION&DIALOGUE」の『隔たるふるまい』展についてご紹介します。『隔たるふるまい』展は、MASH 大阪による「コミュニティセンターを活用した若手アーティスト / クリエイター作品発表機会創出と対話による、新たな HIV / 性感染症予防啓発情報発信事業」の一環です。会場は、大阪市営地下鉄谷町線の中崎町駅より徒歩 5 分にある 4 階建の商業ビルの一室にあるコミュニティスペースです。展覧会では、3 名のアーティストによる絵画、写真、立体作品の合計 26 点が並びました。



野添貴恵

私たちが「場 / コミュニティに根ざした活動」という視点で取り上げたこの事業は、当事者コミュニティに根ざした活動と捉えました。MASH 大阪は、1998 年に発足、社会的少数者であるゲイやバイセクシュアルの若者らに HIV / エイズを含む性感染症等についての正しい情報の発信を目的に活動している団体で、コミュニティセンター dista は、2002 年から運営されています。

会場には机と椅子が用意されており、アートを通じた対話も重視されている企画でした。対話から、専門的でわかりにくい医療最新情報や、「エイズ = 死の病」ではなくなったという情報の更新を促すことも狙いの一つとされています。また「世代、セクシュアリティ、感染の有無を超えて相互理解が波及する未来を」目指して企画されています。多様な人々が相互理解の輪を広げることを目指したダイバーシティの視点をもった「場 / コミュニティに根ざした活動」といえます。

「大阪のアート組織による活動」

山中： 2つ目の特色は「大阪のアート組織による活動」です。大阪を拠点に、大阪や国内の芸術文化振興のために活動をしている組織も府市の補助金・助成金を積極的に活用しています。大阪や関西外からの集客も見込まれる企画が多く、組織の知名度による発信力を持っていることも特徴に上げられます。企画の規模が比較的大きく、補助・助成金額の高い、府の芸術文化振興補助金や市の特別助成に申請しているものが多いです。また、府市以外の助成金も合わせて活用しているケースが目立ちます。



山中俊広

こちらの特色には10の事業が該当しました。2年間の事業一覧を見ますと、2年続けて助成を受けているところも3事業者あります。こちらに該当している組織は計7件になりますが、事業者のお名前をご覧いただくとみなさまもご存じのところが多いと思います。【表2】

【表2】

2. 「大阪のアート組織による活動」

◇2018年度

- （一社）タチヨナ「庄内つくるオンガク祭 2018」（府・芸文振）
- NPO こえとことばとこころの部屋「釜ヶ崎芸術大学・大学院 2018」（市・特別）
- （一財）おおさか創造千島財団「Open Storage 2018-思考する収蔵庫-」（市・特別）
- アートエリア B1 「鉄道芸術祭 vol.8 超・都市計画」（市・特別）

◇2019年度

- （一社）タチヨナ「庄内つくるオンガク祭 2019」（府・芸文振）
- （公財）山本能楽堂「新才能：水の輪@津堂城山古墳」（府・芸文振）
- NPO こえとことばとこころの部屋「釜ヶ崎芸術大学・大学院 2019」（市・特別）
- アートエリア B1 運営実行委「サーチプロジェクト vol.7 クリエイティブアイランド・ラボ中之島～「文化の実験島」としての中之島発信プロジェクト～」（市・特別）
- NPO キャズ「ハンブルク・大阪友好都市提携 30周年記念大阪展/WAVES -FREQUENCES（波-周波数）」（市・一般）
- （一社）日本現代美術振興協会「まちと生きる現代アート」（市・一般）

主なところをご紹介しますと、写真左上のおおさか創造千島財団、右上のアートエリア B1、左下の CAS は、それぞれ自身の拠点となる施設での企画を実施しています。また右下の日本現代美術振興協会は、毎年夏にアート大阪というアートフェアをホテルグランヴィア大阪で開催している組織ですが、今年度の事業として大阪市内の建築を一般公開する企画「イケフェス」に参加し、複数の建築の中で現代美術作品を展示するという内容でした。

「国際交流を軸とした活動」

次に、3つ目の特色は「国際交流を軸とした活動」です。【表3】

【表3】

3. 「国際交流を軸とした活動」

◇2018年度

- 川口珠生「The Astrologer Who Fell Into A Well 展」(市・一般)
- UNFORESEEN 「Unforeseen 3rd International Art Festival」(市・一般)
- ONLY CONNECT 「ONLY CONNECT OSAKA」(市・一般)

◇2019年度

- Responding : International Performance Art Festival and Meeting 「第2回 Responding : International Performance Art Festival and Meeting (R2)」(市・特別)
- 国際交流展実行委「高原直也、フェデリカ・ルッツィ展」(市・一般)
- NPO キャズ「ハンブルク・大阪友好都市提携30周年記念大阪展/WAVES -FREQUENCES (波-周波数)」(市・一般)

6つの事業が該当しましたが、こちらは大阪府の補助金事業はなく、全て大阪市の助成金で実施した事業になります。また、大半が大阪市の一般助成を受けています。この特色に該当する事業には、アーティスト間の交流を主な目的に、海外のアーティストを招へいし、関西・国内のアーティストと共に展覧会、作品発表をする形式が大半を占めています。企画の詳細を見ると、トークイベントなど作品展示以外のアプローチも目立ちます。さらに定期的な実施を前提とした事業も多く、今後も府市の補助金・助成金を活用されることが想定されます。

また、大阪や関西在住の外国人コミュニティに視点を向けるという企画も見られました。一例として、大阪関西在住の外国人アーティストの発表の場を創出した昨年度の UNFORESEEN。そして、大阪に移り住んだ国内外からの移住者のリサーチを踏まえた作品発表とシンポジウムを実施した今年度の Responding が、それに該当します。これらの企画にもうひとつ共通する点として、それぞれパフォーミングアートの作家が軸となっています。他の特色でも見られる傾向ですが、近年の表現の多様性によって「美術/アート」がどんどん他の芸術分野を巻き込み、または巻き込まれていく中で広がりを持っていく状況も垣間見られます。

「ワークショップ形式を軸とした活動」

4つ目の特色は「ワークショップ形式を軸とした活動」です。【表4】

【表4】

4. 「ワークショップ形式を軸とした活動」

◇2018年度

- (一社) タチヨナ「庄内つくるオンガク祭 2018」(府・芸文振)
- IWF 実行委員会「ワークショップフェスティバル・ドアーズ 12th」(府・芸文振)

- ユメハネ実行委「ユメハネフェス 2018」(府・子)
 - 豊能町プロジェクション・マッピング体験実行委「第 3 回豊能町プロジェクション・マッピング体験」(府・子)
 - NPO こえとことばとこころの部屋「釜ヶ崎芸術大学・大学院 2018」(市・特別)
 - 画廊編ぎやらかのこ「第 17 回評論を書くことを考えてみる会」(市・一般)
- ◇2019 年度
- (一社) タチヨナ「庄内つくるオンガク祭 2019」(府・芸文振)
 - IWF 実行委員会「ワークショップフェスティバル・ドアーズ 13th」(府・芸文振)
 - 豊能町プロジェクション・マッピング体験実行委「第 4 回豊能町プロジェクション・マッピング体験」(府・子)
 - NPO こえとことばとこころの部屋「釜ヶ崎芸術大学・大学院 2019」(市・特別)
 - IWF 実行委員会「ワークショップ検索サイト DOORS・アーカイブ」(市・特別)

該当する 11 の事業は府市 4 種類の補助金・助成金事業すべてで実施されていますが、大阪府の「輝け！子どもパフォーマー事業補助金」の「美術/アート」に該当する 3 つの事業すべてが含まれているのも特徴の一つとして挙げられます。

こちらの特色は、最初に紹介しました特色の「場・コミュニティに根差した活動」と重なる事業が多いと共に、「美術/アート」以外の分野も取り込んで実施しているケースが目立ちます。また、一概にワークショップ形式と言えども、事業者それぞれの目的や運営体制によって、実施内容、また形態が多種多様なことも特徴です。

豊能町のプロジェクション・マッピング体験や庄内つくる音楽祭のように、本番の発表に向けて、事前に参加発表者へのレクチャーやワークショップを複数回実施することを軸とした事業のほか、釜ヶ崎芸術大学・大学院や評論を書くことを考える会など、大人を対象としたワークショップ事業も目立ちます。また、ワークショップフェスティバル・ドアーズと釜ヶ崎芸術大学・大学院など、たくさんの多彩なワークショッププログラムで事業全体を構成しているものもあります。参加の敷居を低くして未経験者、初心者を対象としたものから、専門的な技術を体得するためのものまで、手法のバリエーションが 2 年間の補助金・助成金事業の中で垣間見られます。

「デザイン分野による活動」

5 つ目の特色は「デザイン分野による活動」です。【表 5】

【表 5】

5. 「デザイン分野による活動」

◇2018 年度

該当なし

◇2019 年度

- (株)七彩「装苑賞をまとうマネキンたち/前期展」(市・一般)
- インスタ部「HOMEWORKS 2019」(市・一般)
- ALTEMY「Multiple Perception-建築の新しい記譜法の提示-(「35歳以下の若手建築家による建築の展覧会 2019」出品作品)」(市・一般)
- パケクション「もやいなかたち展 PAKECTION!」(市・一般)

こちらで特筆すべきは、昨年度の事業では該当するものが無かったのですが、今年度の事業で大阪市の一般助成に4つの事業がまとまって見られました。この特色の事業の傾向としては、展覧会形式でデザイン作品としての体裁をとっているものが多いです。デザイン分野のスキルや素材を、アートの表現に置き換えるような手法と言えるでしょう。また、インダストリアル・アーカイブとして企業の文化活動の紹介や、ビジネスへの波及を模索するための実験的な取り組みも垣間見られます。

株式会社七彩の事業は、自社が製造した過去のマネキンを同時代の装苑賞受賞作品と共に展示し、企業のアーカイブ活動の一環として行われた企画でした。「パケクション」は、パッケージデザイナーが、大阪の地場産業である包装資材・パッケージ印刷加工の会社の技術協力や、なかには共同制作に近い作品を制作発表する企画でした。またインスタ部は、デザインやデジタル技術など生業の仕事のスキルをアレンジして、アート作品として発表する企画でした。こちらの特色に該当する事業には、デザインとアートの境界線を考えながら、新たなプレゼンテーションの手法を模索するものが目立ちました。

「アーティスト主体による活動」

最後に紹介します6つ目の特色は「アーティスト主体による活動」です。【表6】

【表6】

6. 「アーティスト主体による活動」

◇2018年度

- 7つの船実行委員会「入船」(市・特別)
- 川口珠生「The Astrologer Who Fell Into A Well 展」(市・一般)
- UNFORESEEN「Unforeseen 3rd International Art Festival」(市・一般)
- アートスペース+ギャラリーあべのみ「記録の図書室」(市・一般)
- 林勇氣「遠くを見る方法と平行する時間の流れ」(市・一般)
- ONLY CONNECT「ONLY CONNECT OSAKA」(市・一般)

◇2019年度

- わいわい企画「和紙人形の世界展」(市・一般)
- 大船真言展「中空」実行委「大船真言展中空(ちゅうくう)」(市・一般)
- Far East Audio Visual Socialization「IAFT 19/20 in Osaka」(市・一般)
- おおしまたくろう「道楽シリーズ#1滑琴(かっきん)」(市・一般)

傾向としては、個展やグループ展などアーティストの作品・表現の発表を主とした形式が大半です。若手中堅のアーティストによる実験的な発表形式の企画も目立ちます。近年アーティストの表現手法の多様化と活動範囲の広がりによって、アーティスト支援としての補助金・助成金制度のニーズが、この2年の応募採択件数の増加からも読み取れると思います。こちらは10の事業が該当しました。大阪市の一般助成に集中しており、そのことから比較的小規模な事業として実施されている傾向があります。これらの事業から、具体的に2つの事業をご紹介します。

野添： 2018年度に実施された「入船」というプログラムをご紹介します。主催者は7つの船実行委員会、アーティストの梅田哲也さんが企画の中心となっており、2015年度から開催されている「船にのり、川を移動する」パフォーマンス・ツアーです。

梅田哲也さんは、インスタレーション作品の制作や、ライブパフォーマンスなどを行う大阪在住のアーティストです。大阪で長年活動され、国内外で活躍されています。最近では、2019年末から2020年1月に、福岡市美術館のリニューアルオープンに招待され個展を開催しています。

大阪市採択プログラムは、3種類の船のツアーがありました。1つは、梅田さんによる「夜のパフォーマンス・クルーズ」。2つめは中学・高校生とのワークショップから派生した集団でおこなう「夕方のパフォーマンス・クルーズ」、それから誰も登場しない、何もおこらない「パフォーマンスしないクルーズ」がありました。堂島川や土佐堀川といった中之島周辺のクルーズではなく、東横堀川、道頓堀川、尻無川をとというビジネス街や歓楽街から港湾地域にいたる大阪の水路を巡るクルーズです。

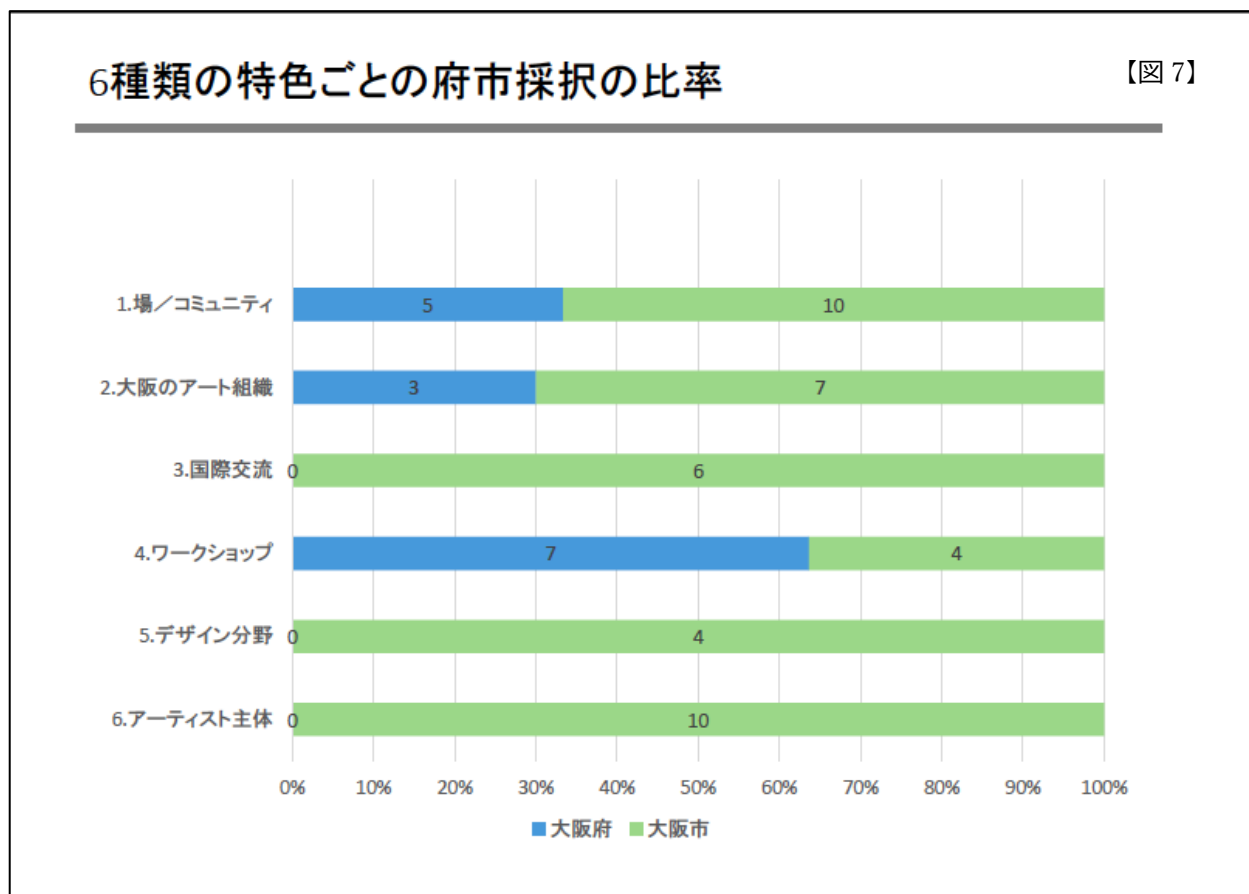
私が乗船した「夜のパフォーマンス・クルーズ」では、梅田さんによる、川の歴史や、河童、がたろの話、2018年の台風21号の被害、アーチ型防潮水門、渡船、川に生息する生物、4年間での変化などについての実況と、ときおり、懐中電灯を使って、視点を誘導し、特定の景色をみせるなど、言葉と風景が有機的にまたは断片的に絡み合うようなパフォーマンス・クルーズでした。大阪を水の都だと感じる事ができたプログラムといえます。

山中： もうひとつ、この特色の事業として、今年度の市の一般助成、此花区のFIGYAで開催されたおおしまたくろうさんの個展「道楽シリーズ#1 かっきん」を紹介します。かっきんというスケートボードにエレキギターの部品を取り付けたおおしまさん自作の楽器の展覧会として、ギャラリースペースではかっきんとその資料展示や、実際に街中を走っている映像とその音を上映しました。さらに期間中の土日には、まちなかに出て実演をするパフォーマンスが開催されていて、その状況がとてもユニークなものでした。アンプスピーカーを背負ってリアルタイムに音が聞こえるようにすると、公園では遊んでいた子供たちが集結したり、商店街の中では商店街の無線放送とつなげて、おおしまさんがスケボーを走らせると音が商店街全体に鳴り響き、お客さんが不思議そうに見聞きしている様子がとても印象的でした。

この企画はおおしまさんがアーティスト個人の企画として市に申請して採択されたものですが、会場となっているFIGYAの運営者 mizutama さんの協力も大きなものでした。またこの地域は10年来アートを介したま

ちづくり活動を推進していることもあり、協働者やまちの特性を駆使して、シンプルな作品発表に留まらない作りが、アーティスト支援としての補助金・助成金制度の基準のよい一例になっていました。

以上が6種類の特徴の説明ですが、ここで改めて府市それぞれの補助金・助成金との分布をご覧くださいませ。【図7】



6つの特徴の事業を、府市ごとで分けたものになりますが、大阪府は1の場 / コミュニティに根差した活動、2の大阪のアート組織、4のワークショップに限定されていますが、大阪市は全ての特色に広く助成をしています。要因としては、大阪府の補助金は原則、個人ではなく団体として申請することが条件であることが挙げられます。

改めて今回紹介しました6種類の特徴ですが、この2年間の実施事業だけでもこれだけのバリエーションが見えるということは、すなわち大阪の土壌にある美術・アートの表現および活動の自由さと包容力の現れではないかと今回改めて感じました。そうした傾向が、大阪府大阪市の活動支援の仕組みの中に反映されていることは、大阪にとって大きな魅力の1つであると思います。

次の第2部では美術館が主題になりますが、ここで紹介した事業の多くは美術館で発表するには難しいかもしれない、または美術館ではない場所や屋外で実施する必然性のあるものも含まれます。また美術館は一定の価値が定まったものが扱われやすい傾向もあることから、ここで府市が支援している事業は、むしろ今後の大阪の「美術/アート」の新たな価値を作っていく可能性を秘めた、大阪で活動する人たちのチャレンジが色濃く反映されていると言えるでしょう。

この大阪府市の補助金・助成金制度では、毎年 200 近くの活動や活動者の実績が蓄積されていきます。大阪で先鋭的な芸術活動をする人たちの情報が集約される仕組みとも言えるでしょう。美術館側の方々にはぜひ、大阪の美術・アートの次の新たな価値を拾い上げるために、いつか何かのかたちで自らの企画で協働するという意識で、この仕組みに注目していただきたいです。また、大阪府大阪市に対しては、この先、将来の大阪の価値を作っている人たちのチャレンジへの支援を、この仕組みを守りつつ、常に改善・充実を続けてください。最後に、今後この大阪府市の助成金・補助金制度の活用を検討されている方々へ。今回ご紹介した 6 つの特色に該当することが審査基準ではありません。むしろ、この特色以外の新たな提案が応募事業の中からどんどん現れていくことが理想です。みなさんのチャレンジ・意欲的な取り組みが、府市の支援の仕組みを通じてより力強くなり、美術館との協働や連携を経て大阪の美術・アートの力として発信され、市民が享受する、そうした価値の発展的な循環がなされる、そんな大阪になることを願っています。



会場風景

13 : 40～

テーマ :

第二部 「美術コレクションから考える大阪」

○司会 : 小吹隆文 (フリーライター)

○登壇者 : 菅谷富夫 (大阪中之島美術館準備室室長)

中塚宏行 (大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課研究員)

小吹隆文 : 第2部を始めます。まずは登壇者の紹介です。私は、小吹と申します。大阪に住んでおり、主に美術系ライター、記事を書く仕事をしております。今回、私は進行役として、主にお二人に語っていただきます。菅谷富夫さんは、大阪中之島美術館準備室の室長をしておられます。中塚宏行さんは、大阪府の府民文化部文化課で研究をしておられます。どちらも私自身は昔からお世話になっています。



小吹隆文

「美術コレクションから考える大阪」ということで、主に美術館のコレクションをテーマにします。美術館のコレクションというのは、美術作品や資料、その他などです。美術館なら常設展示やコレクション展という名前で作品を展示している場で、それらの作品等を目にする機会が多いと思います。コレクションの役割は、実はそれだけではなくて、今思い浮かぶだけでも調査研究や保存、他にもあると思います。そういう我々の目に触れないところでもコレクションは活用されているという実態があります。それを今回、ここで、もう少しよく周知することができればと思っております。ではまず菅谷さんからお願いいたします。

菅谷富夫 : ご紹介いただきました中之島美術館の菅谷でございます。新しい美術館の話をして、その後コレクションの話をしてします。

中之島4丁目、国立国際美術館の北側の敷地に建設中の「大阪中之島美術館」は、西側に大阪大学中之島センターがあり、東側には関電ビルディングがあるというロケーションです。大きさは、地上5階建て、地下はありません。今は、基礎工事が終わってそろそろ1階の鉄骨を組み立てるところです。延べ床面積は駐車場等を除いて、1万7千平方メートルあまり。どのくらいの規模かという、隣の国立国際美術館が1万3千くらいなので、ちょっとそれより大きいくらいです。高さは約40m。これも隣にある大阪市立科学館よりちょっと高いくらいです。鉄骨造で基礎免震なので全体が免震構造となっています。内部はエスカレーターで上に行くというような形です。

コレクションは、概略を掴んでいただくための概数で、総数約 5700 点、購入が約 1100 点、寄贈が 4700 点。評価額は購入が 152 億円（実際に購入した金額）、寄贈はご寄贈いただいたときの評価額で約 110 億円です。合わせて 262 億円となります。1990 年に大阪市の中に「大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室」が発足した時点、約 30 年前から収集を始めました。

2019 年 3 月ごろの概数ですが、分野別では日本近代が 1869 点。代表作をいくつか紹介します。佐伯祐三は、準備室が発足する時にご寄贈等をいただき、美術館計画のきっかけの一つとなりました。その後、購入・寄贈・寄託を含めて 60 点余りのコレクションを持っております。他に、岸田劉生、小出楯重、小磯良平などを収集しております。左下の福田平八郎の「漣」という作品ですが、一昨年、国の重要文化財指定を受けております。



菅谷富夫

西洋近代 227 点、西洋近代という分類の仕方がどうかという議論はありますが、わかりやすくこのように表記しています。モディリアニを始めとした西洋近代美術です。モディリアニはご存知のように、最初期、1990 年に購入した作品です。当時非常に高額だと物議を醸しましたが、今では最重要なコレクションの一つだと世界に対しても言える作品の一つです。ここにある作品はどれもいろんな美術館に貸し出し等もしていますので、ご覧になった方も多いと思います。日本国内だけでなく、海外にも何度か貸し出ししております。モディリアニもノルウェー、韓国、フランス、ニューヨークにも貸し出ししております。他の作品も世界中旅をしている作品です。

日本現代が約 2000 点。吉原治良の作品等もあります。吉原治良については、あまり作品を売らない人だったので、10 代の頃の作品から最晩年のものまで手元に残されていたんです。それを没後、購入とご遺族からのご寄贈ということで、800 点収蔵しております。ご覧いただける機会が少なかったのですが、開館後は工夫して観て頂けるようにしたいと思います。具体美術協会に関係する作品、また、森村泰昌をはじめとする大阪で活躍した戦後の作家たちの作品を所蔵しております。

現代の海外の作家については、マーク・ロスコを始め、戦後のアメリカ美術、バスキアなど。バスキアは先日のバスキア展にも出品しました。数は少ないですが、代表的な作品を収蔵しています。

だいたいの美術館は絵画・彫刻に加えて工芸となりますが、この美術館の当初の構想を決める委員会で、工芸はどこ美術館でもしているのが、大阪という土地で近代・現代の美術館を造るのであれば、近代デザインを加えたらどうかということが決まりました。ご覧いただいているパワーポイントには家具しかありませんが、他にもグラフィックデザインとしてポスターもあります。19 世紀から現代までの作品を収集しております。ポスターは、大阪の天保山のサントリーミュージアム閉館後に、そのポスターコレクション 1 万 8 千点を寄託いただきました。デザイン 216 点にグラフィックデザインが加わります。

小吹： 続いて、中塚さんお願いいたします。

中塚宏行：大阪府の美術コレクションについてご説明いたします。大阪府の 20 世紀美術コレクションは約 7900 点の様々な作品を収蔵しています。どんな作品があるかという、大きく 4 つに分類できます。

1. 大阪トリエンナーレコレクション
2. 関西の現代作家 1945～2001
3. 現代版画のコレクション
4. 現代写真のコレクション



中塚宏行

大阪トリエンナーレは 1990 年から 2001 年まで約 10 年間にわたって開催しております。その受賞作品を中心にコレクションしています。「大阪トリエンナーレ 1990」グランプリ作品《8月の草原》(Richard GILKEY / アメリカ / 1990 / 絵画〈平面〉)です。アメリカの作家ですが、現在、マイドームおおさかの 1 階に展示していますので、ご覧いただけます。《走る群衆 No.2》(張敏傑 / 中国 / 1994 / 版画 / 「大阪トリエンナーレ 1994」グランプリ)は、版画のトリエンナーレのグランプリ作品です。日本の現代作家、山口啓介さんの作品《Calder Hall Ship-ENOLA GAY》(山口啓介 / 日本 / 1993 / 版画〈銅板〉 / 「大阪トリエンナーレ 1994」関西ドイツ文化センター・デュッセルドルフ市特別賞)。京都の出原司さんの大画面の版画。《イ・ブルアーリバス・ユーナム》(出原司 / 日本 / 1997 / 版画〈リトグラフ〉 / 「大阪トリエンナーレ 1997」(財)大阪 21 世紀協会賞)。韓国の李在孝という作家の大きな木彫です《無題》(李在孝 / 韓国 / 1997 / 彫刻〈立体〉 / 「大阪トリエンナーレ 1998」グランプリ)。万博記念公園駅の中で 2 点展示しておりますので、みなさんにご覧いただけます。

みなさんよくご存知のヤノベケンジさんは、2001 年のトリエンナーレで銀賞を受賞されました。《アトム・スーツ・プロジェクトー大地のアンテナー》(ヤノベケンジ / 日本 / 1985 / 彫刻〈立体〉 / 「大阪トリエンナーレ 2001」銀賞)は大阪府立江之子島文化芸術創造センターに収蔵されております。岡田修二さんの手を大きく描いた作品《テイク #15》(岡田修二 / 日本 / 1999 / 絵画〈平面〉 / 「大阪トリエンナーレ 2001」毎日放送賞)。濱谷明夫さんのファイバーアート作品も収蔵しています《軌道 6》(濱谷明夫 / 日本 / 1999 / 彫刻〈立体〉 / 「大阪トリエンナーレ 2001」サントリー賞)。

池垣タダヒコさんは、茶屋町のピアスタワービルの 1 階でご覧いただけます《Dance》(池垣タダヒコ / 日本 / 1991 / 彫刻〈立体〉 / 「大阪トリエンナーレ 1992」毎日放送賞)。内田晴之さんの作品《FLY-1》(内田晴之 / 日本 / 1992 / 彫刻〈立体〉 / 「大阪トリエンナーレ 1992」銅賞)はマイドーム大阪で展示しています。チェコの作家スティブレックの作品《生き物》(STIBUREK, Antonin / チェコ / 1999 / 彫刻〈立体〉 / 「大阪トリエンナーレ 2001」銅賞)は咲洲庁舎で展示し、見に来ていただくことができます。《顔 2》(陳龍斌 / 台湾 / 1996 / 彫刻〈立体〉 / 「大阪トリエンナーレ 1998」銅賞)も、大阪府咲洲庁舎に展示しています。

小吹： 念のために、咲洲庁舎というのは、南港の WTC ビル(大阪市住之江区)です。

中塚： ここまでの紹介はトリエンナーレの作品でしたが、他にも、関西の現代作家として、須田剋太、三尾公三、森口宏一、清水九兵衛、齋藤眞成、上前智祐といった作家の作品を、まとめてコレクションしています。須田剋太さんの作品の展覧会は、間も無く東大阪市民美術センターと大阪府立江之子島文化芸術創造センターで開催されますので、そこでコレクションを見ていただけます。チラシも配布資料に入っておりますのでご覧ください。

津高和一さんは阪神淡路大震災で亡くなられた、関西の抽象画家の先駆者です。本コレクションにも 90 点入っております。三尾公三さんは京都で活躍した具象系の作家です。『FOCUS』（新潮社）の表紙もずっと続けておられたんですね。それから、大阪の彫刻家として森口宏一さんの作品もまとめて入っています。初期の平面作品と、後半の鉄の彫刻も入っております。清水九兵衛さんのアルミ彫刻。これも今、咲洲庁舎で大半を展示していますので、ご覧いただくことができます。それから、具体美術協会の中で、上前智祐さんの作品がまとめて収蔵されています。具体美術協会では嶋本昭三さんの作品も所蔵しています。その他には、伊藤継郎さん、金田辰弘さん、齋藤眞成さん。齋藤眞成さんは 102 歳で昨年お亡くなりになりましたが、京都のお寺真如堂の僧侶で作家です。金光松美さん、この人は、ニューヨークでずっと活躍していた日系アメリカ人です。野村耕さん。

現代版画のコレクションは、大阪府立江之子島文化芸術創造センターの前身として、大阪府立現代美術センターがあり、その前身として大阪府民ギャラリーがありました。その時代に、版画を中心に収集していました。ですので、版画の作品がまとめて収蔵されています。前田藤四郎さんの作品などがあります。浅野竹二さんもまとめて収蔵しています。泉茂さんの作品もある程度。吉原英雄さんは、大阪市のコレクションとだぶるところがありますが、黒崎彰さん、井田照一さん、木村光佑さん、木村秀樹さん、イチハラヒロコさん。

それから、現代写真コレクション。これは 1990 年に花博（国際花と緑の花博覧会）がありまして、花博写真美術館で展示したものをまとめて寄贈を受け、海外の重要な写真家の作品をまとめて収蔵しています。アンセル・アダムス、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ジョン・ファール、ジョン・ディボラなど。それから大阪芸術大学の初代写真学科長であった、岩宮武二さんの作品もまとめて収蔵しています。田中幸太郎さんは、花火の写真ですね。津田洋甫さんの作品。

変わったところで、陶磁器の作品も収蔵しています。これも花博の時に寄贈を受け、花器を収蔵しています。古いところでは近代絵画の国枝金三さん。田中一光さんのポスターもコレクションしています。ざっと作品を紹介させていただきました。

今、大阪府立江之子島文化芸術創造センターで麥生田兵吾さんの「ココロヲウツス」という展覧会を開催しています。ここにも、大阪府 20 世紀美術コレクションを、麥生田さんの作品と大阪府のコレクション作品を合わせて展示していますので、またご覧いただければと思います。

それから、A3 の資料に、大阪府の美術行政のあゆみを一通りまとめておりますのでご覧ください。1974 年に大阪府民ギャラリーが発足し、大阪府立現代美術センターとなって、1980 年に中之島に開館します。その頃には版画を集めていたんですけども、大阪府の美術館を作ろうという計画が一時起こりまして、現代芸術文化センター設立準備室が一旦発足したことがあります。現代芸術文化センター構想というのは、ちょうど、

この辺り、なんば再開発の一つとして造ろうという計画がありました。これが、ちょうどバブルの直後ですね。その後、財政悪化等で構想は廃止することになりました。大阪府として美術館は建てないという方針になっています。コレクションは展示してご覧いただけると同時に、大阪府立江之子島文化芸術創造センターに大半の作品は収蔵されています。そこで随時コレクション展等を含めてみなさんにご覧いただくような形をとっています。

大阪トリエンナーレは1990年から2001年まで開催しました。同時期に関西系の現代作家展を吹田にあった国立国際美術館などで開催していました。大阪トリエンナーレを機にまとめてコレクションがされてきたのですが、大阪トリエンナーレが中止になったあとは、基本的に、大阪府のコレクションをいかに活用していくかという方向で知恵を絞りながら現在に至っているということです。

小吹： ありがとうございます。このA3の資料、ものすごくわかりやすく、すごく価値のある資料だと思いました。大阪府の美術のコレクションの流れというのが一目でわかる資料ですね。ちなみに、中塚さんは、この年表のいつから大阪に？

中塚： 私は、3回目のトリエンナーレ、1992年（平成4年）の5月に大阪府に着任しました。

小吹： 現在まで一貫して関わっておられる方は中塚さんお一人でしょうか？

中塚： そうですね。

小吹： わかりました。ありがとうございます。お二人からのご報告がありましたので、次の議題に入ります。次は、活用状況について。美術館でコレクションを我々が目にする機会は、コレクション展、常設展が多いです。大阪は府も市も、市はもうすぐ美術館が建ちますが、長い間、美術館を持たないコレクションという特殊な状況で推移してきた経緯があります。



小吹隆文

なおさら、コレクションの活用が市民には見えにくい。その辺りについて、どのような活用してきたのかや、それぞれにおいてどういう方針で活用されてきたのかを語っていただければと思います。菅谷さんから。

菅谷： 基本的に準備室ですので、美術館を作るための仕事をするということです。それまでのコレクションの活用、公開は今までも



写真：左より菅谷富夫、中塚宏行

かなりの回数やっております。準備室ができた頃からやっております。天王寺の大阪市立美術館で展覧会をしたり、南港のWTCの隣のATCにあったミュージアムはいい設備がありましたので、そこで90年代にたくさん展覧会をやっていました。年2度ほど、1000平方メートルの空間です。

小吹： 今はイベントが行われている場所ですよ。

菅谷： かなり広い吹き抜けの空間です。その後、6-7年前までは心齋橋の出光美術館の最上階に大阪市立近代美術館（仮称）心齋橋展示室があり、約600平方メートルの空間で年3-4回の展覧会でコレクションの公開をしていました。他にもいろんなところで、テーマを決めて展覧会を開催していました。その間、90年代には梅田の大丸百貨店の大丸ミュージアムなどでも開催していました。

小吹： 90年代は旺盛なというか、定期的に紹介の場を得て、心齋橋時代も定期的にコレクションが公開されてきた。実際のところ、コレクションのうち、どのくらいの割合のものを公開することができたのでしょうか。

菅谷： ATCミュージアムで開催していた時は、展覧会のテーマにもよりますが、およそ120-130点を展示していました。大きい作品もあれば小さいものもあるので、大きい作品が多ければ点数は少なくなりますが。心齋橋の時はもう少し少ないですね。

小吹： あそこはもともとそんなに大きくない場所ですからね。

菅谷： エレベーターとか、展示室の天井高の制約であまり大きいものは展示できなかった。コレクションの中で一番大きなものは、一枚物の現代美術で幅が6mありますので、そういう作品は展示できなかった。高さも5mとかありましたし。

小吹： ちなみに、出光美術館大阪というのは、今は撤退していますが。長堀通りの東急ハンズの隣、1階にガソリンスタンドがあるビルが一番上の階にありました。もともと、出光美術館は工芸品を主に扱う美術館ですので、最初から大きなものを展示するスペースとしては設計されていなかった場所ですよ。

美術館のスタッフの間で共有されていた、コレクションの活用の仕方に関するポリシーや考え方などはあったのでしょうか。

菅谷： 活用の仕方というか、美術館ができたならこれをコレクション展示として活用しよう。当然、収集の時点で大きく5つの方針が決まっていました。(1) 佐伯祐三と関係する作家、(2) 大阪と関わりのある作家、(3) 近・現代の重要な作品、(4) 近代のデザインに関するもの(世界・大阪)、(5) それぞれの作品と資料。その方針に沿って収集し、開館後にそれらを公開する。開館するまでにコレクションをどう活用するかは、あくまでも開館に向かって今あるものを市民のみなさんに報告する、見ていただくということになっています。

小吹： 当初はもっと前に美術館ができていたという前提で活動をされていたと思います。

菅谷： この美術館は90年に準備室ができて、やっと30年かけて開館ができる。こんなに長くかかった理由はいくつかあります。1990年に準備室ができた当時は、大阪だけでなく東京都現代美術館、広島県立美術館、愛知県美術館とか、いくつかの美術館がほぼ同時期に開館準備をしていた。1980年代までの日本の美術館というのは、コレクションがあまりない。コレクションがないのに美術館を造るということで建設にかかる。それはどうも違うのではないかと。大阪に新しい美術館を造る時にはまずコレクションを優先して、その方向が見えた段階で、それに合わせる形で建築を造っていく。基本計画委員会の中でそういう議論があったのが、他と比べて建設が遅れた理由の一つです。建築にかかる前にコレクションを充実させることを優先した。そのうちに大阪市の財政事情が悪くなったりしました。

小吹： 中塚さんお願いします。

中塚： 作品の活用については、美術館の計画がストップした時点から本格的に始まっています。年表で言うと、貸し出し事業の開始は96年。貸し出し事業とわざわざ言うまでもないんですが、美術館や作品を所蔵しているところは通常貸し出しをします。それをあえて「貸し出し事業」をするんだということで、積極的にいろんなところに貸し出したり、展示をしたりしてこうと動き始めました。



作品を収集する方向から作品を活用する方向に転換したのが1996年頃だ
中塚宏行
ったかだと思います。その頃、りんくうタウンがかなり赤字を抱えており、活性化していなかった。なので、りんくうタウンに展示室を設けたりしています。りんくうパビリオンというのは、駅ビルのテナントの一つです。本格的にりんくうタウンに現代美術空間、これは言ってみれば箱ですが、りんくう現代美術空間(RCAS/ルーカス)を設置、関西ワシントンエアポートホテルの1階に展示場を設けました。言うなれば常設展示場ですから、美術館のようなものができたんです。ただ、作品をずっと常設展示していますが、ほとんど広報活動を何もしていなかったのが、パンフレットを作っただけ。現地にも人(スタッフ)がいるわけでもない。ホテルに来たお客さんには見てもらえる。近くに来た人なら見られる。作品はそこに行けば見ることはできたが、大

阪市内からはアクセスが遠いですし、あまり多くの人にも知られていなかったのも、ご存知ない方が多かったのではないかと考えています。

同時に、大阪港の海岸通りギャラリー・CASOも同年に開館しています。一時期、今は大阪府立江之子島文化芸術創造センターにある大阪府の作品を、海岸通りギャラリーの収蔵庫に保管していました。作品を保管し、ある程度の予算もつけて、広いスペースがありましたので、常設展示や企画展示を行っていたことがあります。2001年の大阪トリエンナーレはそこで開催しました。あそこは大きなスペースで、現代美術館と言ってもいいくらいの場所でした。

りんくうタウンや海岸通りギャラリーという大きな箱はあったんですけども、事業費がなかなかついていかない。スペースを設けて、そこに作品を持って行っただけでも、運転資金、保管料までは予算をみてもらえたけれども、そこで活用することまでは財政の面倒をみてもらえない。十分に活動ができなかった。府のコレクションの展示はできたが、動きのある活動は限定的であったと思います。

大阪トリエンナーレの彫刻で、かなり大型の彫刻作品がたくさんあり、それをなんとかみなさんに見てもらえる形にしなければいけない。そのために、半分は苦肉の策として大阪モノレールの駅舎に大きな作品を配置し、みなさんに見ていただくこと。管理、保全、見栄え、メンテナンスにおいて様々な問題はありましたけども、倉庫に眠っているよりはいいんじゃないかということで、駅舎で見てもらおうという。

万博記念公園内の自然文化園に屋外で見てもらえる彫刻を展示したりもしています。そういったこと以外には、大阪府立現代美術センターでの展示をしたり、現在は大阪府立江之子島文化芸術創造センターで展覧会を随時開催しています。最近では大阪府内のさまざまな美術センターなど、東大阪市民美術センターや豊中市立芸術文化センターなどもありますので、そういった美術施設と協力しながら大阪府の作品を見ていただく機会をできる限り作っているという状況です。

小吹： モノレールの駅に彫刻作品を置き始めた頃、知らずに行った時はかなりびっくりしました。保存上大丈夫だろうか。今はずいぶん、駅もデザインが綺麗になって、作品の見栄えもよくなったと思います。管理はモノレールの会社がしているのでしょうか？

中塚： 通常管理は、何かあったときには連絡をいただくといった程度です。作品の材質なども考慮して、屋外に設置しておいても影響のないものを選んでいきます。これにつきましては、ほとんど予算をかけずにやっていますので、展示方法についてはご批判をいただいたこともありました。

小吹： モノレールの駅舎や咲洲庁舎で設置されている作品は、今後ずっとそこに設置される予定でしょうか？

中塚： 咲洲庁舎についてはほぼ今のまま続けることができるんじゃないかと思います。ただ、モノレールの駅舎は、モノレール会社が、駅ナカということでスペースを活用したいと、設置していた作品の撤去や移動要請があります。その要請については対応していきます。

小吹： 次に、「コレクションを活性化するには？」というテーマがあります。ただ、お二人にとっては「もう活性化しているよ」と言いたいところもあるかと思います。今のお話を聞いていると、コレクションを貸し出す、展示すること自体よりも、それをどうやって周知していくのか。そのための予算や財源が足りていないのではないかという印象を持ちました。これについては、それぞれどのような考えをお持ちでしょうか。

菅谷： 収集活動が活性化するのか、コレクションの公開活動が活性化するのか、いずれも大阪府の場合と同列ではないと思います。展示についていうと、いろんなところに展示することもあります。大阪市はもう美術館ができる。建築が決まっていなくても美術館を造るという前提で収集してきました。あくまでも今持っているものを見ていただく機会を作るという姿勢でやってきました。公開自体を一つの事業と位置付けるというよりも、美術館ができあがることに向けての公開活動だったと思います。

小吹： 収集面においてはどうですか？

菅谷： 2018年度から、しばらく凍結されていた収集予算が数年ぶりに復活しました。開館が決まったということをお聞きになったからか、寄贈作品も増えておりますので、そういう意味では活発になっていると言えます。

小吹： 具体的に建物がいよいよできるぞということが知れ渡る。それがいろんな面でプラスに動いているんでしょうかね。

菅谷： そうですね。

小吹： コレクションについては、我々の目に見えないところで、調査するとか、修理するとか、そういったことにまつわる体制や時間といった面についてはどうでしょうか。

菅谷： 作品は持っているだけでも、だんだん劣化します。当然、展示したりすると痛んでくることもあります。細心の注意を払っても、経年劣化は防ぎようがないところもあります。例えば、佐伯祐三の作品も、1920年代に描かれたものです。ほとんど手が入っていなかったらしいですが、今から約20数年前に、上にかかっ

ているニスを除いて、新しいニスを掛け直すと、全然印象が変わって、明るい色になった。「佐伯祐三はもっと暗い作品じゃないんですか？」と指摘されたことがあります。色も入れていませんが「ニスを変えたんですよ」とお話ししたら、「色を入れたんですか？」と。それくらい、数十年経つとニスも汚れ等でだんだんくすんでくるんです。

修復や、よい状態に保つための作業は毎年何百万かの予算をかけてやっています。それなら、大きな予算を入れて一度にやったらどうだとも言われますが、そうやろうと思っても修復家のキャパシティ、仕事量もあります。お金さえかければ一度にできることでもありません。信頼できる、経験のあるところに作業をお願いして、年間何十点かずつ作業を進めています。吉原治良も作家本人は、描いてずっとしまい込んでいたんですが、それでも痛んでいますので、展示できる状態にするには色が落ちそうになっているのを止めたりとか、そういったことをしないと公開ができないので、計画的に進めています。

福田平八郎の《漣》も、屏風だったんですが、描いた当時は屏風ではなかったのではないかという説がある。屏風だと、展示するたびに真ん中のところが痛むんです。痛んできていたので、修復を専門にしている表具屋さんに依頼して一枚ものに張り替えました。公開されたものをご覧になる方にはわからないかもしれないが、少しずつ進めています。

小吹： 個人的には、そういったエピソードはすごく面白いと思います。昔は無理だったかもしれないけど、今は、インターネットを使えばいろんなプロセスを可視化できるんじゃないかと思っています。今まで見えない物語が、美術館の現場では実はいっぱい進んでるんだよというのを、公開してもらえると、すごく面白いんじゃないかなと思います。そういった話は内部で出たりするんでしょうか？

菅谷： ネットでニュースを二ヶ月に一度アップしています。先日、関根の作品の修復について公開しました。前に修復した時のノリが表に出てきて、シミになっていて。久しぶりに貸し出すために出したらシミがあつて大騒ぎになったので、それを修復したという顛末を公開しています。

小吹： 公開しているんですね。その辺りこまめにチェックしていると面白い話が。

菅谷： 意識してそういうことも公開するようにしたい。オープンしたら実際のものを見ていただきながら、こうでしたという話もしたいなと思っています。

小吹： そうですね、それは面白いですね。中塚さんいかがでしょうか。

中塚： 本来、美術館では、大阪市のコレクションもそうですが、きちんとした温湿度管理のもとに、学芸員がいるところでないと貸し出さない、展示しないのが基本です。我々も本来はそうしたいという思いが多々あ

りますが、それで、手をこまねいていいのかと考えると、そういうわけにもいかない。大阪市のコレクションと比べると、府のコレクションは、そこまで考えなくてもみなさんの身近なところでご覧いただくことができるのではないかなと。そういう判断のもとに、多少環境に目をつぶっている面もありますが、目にさせていただこうと。そういう考え方で今まで展示してきたのが本音だと思っています。

大阪府本庁舎、咲洲庁舎での展示は美術回廊と呼んだりしています。大阪府立国際会議場の中にもかなりの作品が展示してあります、大阪府立大学のサイエンス棟にも展示していますし、大阪大学の国際公共政策研究科、近いところでは府庁の近くに新しくできた大阪国際がんセンターなどにも展示しています。がんセンターは環境もいい場所です。

小吹： それは一般の方も見ていただける場所に展示されているのでしょうか。

中塚： 見ていただける場所です。がんセンターですから、作品を見るために来る方はいませんが、病院に来た方には見ていただけます。病院関係では、枚方にある大阪精神医療センターにも展示しております。大阪府立江之子島文化芸術創造センターのすぐそばの日本生命病院とか。咲洲の大阪アカデミアという研修センターがありますが、そこにも《箱舟》という高橋廣道さんの大きな作品を常設しています。行っていただければ見ていただけます。これらの作品設置場所は同センターのHP (www.enokojima-art.jp/collection/) から検索できるようになっています。環境の良し悪し、保存状態、メンテナンスに対する懸念がまったくないわけではありませんので、それは時折、様子をみながら対応をしていく必要があると思っています。

小吹： 先ほど、東大阪市民美術センターや豊中での展示のお話がありました。例えば、大阪府下の茨木市や枚方市などにもアートセンターがありますが、そういった府内の市町村の施設で展示を行う活動、事業はどのような状況でしょうか？

中塚： 枚方市については10-20年前は府のコレクションを展示していたことがあります。枚方市にも美術館構想があり、一時期作品を集めていましたが、ところが、市長が変わって美術館構想は廃止になりました。枚方市で自分のところのコレクションをどう活用するかという、同じような問題を抱えております。大阪府のコレクションよりも自分のところのコレクション活用が先決だということになります。一緒にあわせた展示ができればということで、話をしに行ったりはしています。

豊中市も美術館構想があったんですが、美術館そのものは取りやめになって、音楽中心の豊中市立文化芸術センターができました。豊中市もコレクションを一時期集めていて、収蔵庫もあって、展示室もあります。ただ、常勤キュレーターがおらず美術活動はそれほど活発ではないので、協力して、府のコレクションと豊中市のコレクションをあわせる形で展覧会を一緒にやろうということで昨年開催しました。大阪府としては、今後

コレクションがあり、展示設備があるところとの協力をしながら、コレクションの活性化を図る必要があるのではないかと。堺、枚方、豊中、東大阪などですね。

小吹： ありがとうございます。中塚さんとお話して思ったのが、市はこれから美術館ができて、実際はわかりませんが、予算的にも人間的にも充実していくであろうと予想されます。府は先が見えない状況ということで。中塚さんのチームで人員・予算面での今後の改善点などはあるのではないかと思います。その点いかがでしょうか。

中塚： 大阪府は美術館ではないですが、大阪府立江之子島文化芸術創造センターがありまして、そこにはスタッフがおります。コレクションもその中にある。現在開催中の展覧会もそうですが、同センターのスタッフを中心にやっていく形になるのではないかと。大阪府の文化課が、いかにバックアップしていくのか。それについては、予算的な措置を今後どうしていくのか。まったく何もなしでは活動できない。ある程度の予算が同センターにはありますが、本格的なコレクションの活用などにはまだまだ不十分です。文化課の中で、予算獲得に向けてがんばるしかないと思っています。

ただ、それをするにしても我々は公務員ですから、知事の理解のもとで予算構成ができていくわけです。自分勝手に予算を減らしているわけでもないし、予算を増やすことができるわけではありませぬので、大阪一般府民の盛り上がりがないと、そういう方向になかなか向かっていかないと思います。大阪府の政治構造を支えている、今の状況を作っているのは、大阪府庁そのものではなくて、大阪府民がそういう形をつくっている。選挙でそういう形になっているわけですから。そういう状況を正確に認識する必要があると思います。美術に関心を持つ、美術に愛を持つ人たちが一生懸命、がんばるしかないんじゃないかという気持ちがございます。

小吹： そういう声を届けたい場合、現状、例えば大阪府立江之子島文化芸術創造センターにメールを送るのかとか、声を届けられる場所はあるのでしょうか。

中塚： 声を届けるのは、大阪府も大阪市もパブリックコメントなどで、その気になれば届くようなくみが出来上がっています。そういう方法はわりとあります。

小吹： 大阪の美術をより活性化したいのであれば一人一人が積極的に声を上げていくことも大事ですね。ちなみに菅谷さんは、一旦定年されてますよね。

菅谷： はい。

小吹： 中塚さんは？

中塚： 私もすでに一旦定年退職しており、この3月で再退職です。

小吹： 3月で終了なんですか。何も怖いものなしなので言いたいことを言ってもらっても。

中塚： 後の方が一生懸命がんばっていただくしかない。私は私のできる範囲でいくらでも貢献はさせていただきます。

小吹： 何らかの形でかかわる可能性はあるんですか？

中塚： 今は何も予定はありません。

小吹： 知らない話をたくさん聞いて勉強になりました。私がコレクションについて思うのは、美術品であるんですが、府や市の財産であり資産でもある。であれば、その資産価値を減らさないようにしなくてはいけないんじゃないかという気持ちがあります。そのためには日々継続したメンテナンスや活動が大切なので、美術館の方にぜひお願いしたい。と同時に、市民が関心を持っておく必要がある。パブリックコメントなどで少しずつでも声をあげていくことが大事なんだと思いました。

まずは何よりも、関心を持つことですよね。私は国立国際美術館に行くたびに、こまめに大阪中之島美術館の工事の状況をチェックしています。美術館から階段を上がるところがあって、そこから工事の状況がすごくよく見えます。今、基礎がほとんど終わっている段階で、これから柱が建っていくと思いますが、ここからはものすごく工事の展開が早くなって行って、毎月姿が変わっていくと。建物が出来上がっていく瞬間に立ちあえる、いいタイミングだと思います。

菅谷： そろそろ鉄骨を組み立て始めますので、あっという間に出来上がってくると思います。来年6月末が契約上の竣工日です。その後、什器を入れたり、作品を引っ越ししたりして、正確なオープン日は決まっていますが、2021年度内にオープン予定です。もう少ししたらいろいろ発表できることが増えてくるかと思います。今もありましたが、関心を持っていただくことが大事ですので、オープンしたらぜひ展覧会等においていただきたい。こういった機会もあると思いますので、積極的に我々も発信していきますので、そういう時ぜひ集まっていたら、参加いただけたらと思います。

小吹： では、第2部を終了します。ありがとうございました。

中西： ありがとうございました。一つ一つの作品を見ていると思い出することがあったりすると思います。作品は思い出につながっていると思います。最初にも言いましたが、関心を持つことも一つ、声をあげるのは大変ですが、例えば Wikipedia に何か項目をつくって書いていくことなど、個人でもけっこうやれることはいっぱいあると思っています。府民や市民の一人一人が大阪の“美術”を盛り上げていければと思います。



会場風景

15:00～

テーマ:

第三部「大阪から「美術/アート」を拓く」

○司会 : **中西美穂** (大阪アーツカウンシル統括責任者)

○登壇者 : **後藤哲也** (グラフィックデザイナー/近畿大学文芸学部准教授)

シーズン・ラオ (アーティスト/UNKNOWN ASIA 審査員)

宮本典子 (一般社団法人日本現代美術振興協会事務局長)

木坂葵 (おおさか創造千島財団事務局長)

中西: ただいまから第3部を始めます。ここにいる4人の方々と一緒にお話をします。個性も異なりますし、アプローチも異なります。どの方もデザイン・アートの分野において、夢がある活動をしているということが共通点のミドルキャリアです。ミドルキャリアについては最初にも言いましたが、



中西美穂

「間」の世代です。若い人の話もわかるし、上の世代の「昔はよかった」という話も聞きながら、自分たちの活動をしている人たちです。最初にお話いただく後藤さんは、グラフィックデザイナーとして活動されています。大阪を拠点に世界の人々と繋がっていくような仕事をしています。次のシーズン・ラオさんは、アーティストとしてアジアの各都市を行き来しつつ、つなぎ手となっています。宮本典子さんは、そのようなアジア各国で活躍するアーティストを始め、大阪という都市でアートシーンを作り出していくための活動をされています。最後の木坂葵さんは、民間企業の視点から芸術活動支援に取り組んでいます。それぞれ本当に違いますが、すごく、こういう風な感じでやっているんだなということが知れて、面白いと思いますので、まずはお話を伺っていきます。では、後藤さんからお願いします。

後藤哲也: 後藤と言います。宜しくお願いします。大阪から「美術 / アート」を拓くということですが、私は基本的にはグラフィックデザインの領域で実践をしたり、研究をしたりしています。同時に、海外との接点をつくることもデザインとアートの文脈でやっていますので、そんな理由から呼んでいただいたのかなと思います。海外との接点を中心にお話したいと思います。

グラフィックデザイナーとしてデザインをするだけでなく、展覧会を作ることもしています。昨年は、UAE のシャルジャで行われた、中東初のグラフィックデザインビエンナーレでキュレーターを務めました。いわゆるデザインだけではなく、展示のキュレーションもやっています。アート



後藤哲也

ビエンナーレなどと同じで、中東の取り壊し予定の銀行ビルを、1階から4階まで全部展示会場としてグラフィックデザインの展覧会を行いました。

フロアごとにキュレーターが決められて、その中の一部を私が担当しました。こういった形で海外の展覧会に呼んでいただいたり、今年も5月に、韓国の光州にあるアジアカルチャーセンターで、グラフィックデザインの展覧会キュレーションをする予定です。

(こういった活動をはじめた) 最初のきっかけですが、日本タイポグラフィ協会という文字のデザインを扱う協会の公報誌『タイポグラフィックス・ティー』の編集長を2011年から2年間務めました。その時にアジアのデザイナーとの交流が始まりました。当時、2010年代初頭はあまりアジアのデザインに興味に向いていなかった頃に、そういったものを扱ってみようと広報誌で紹介しました。それを踏まえて、当時の大阪 ddd ギャラリーで、7都市7組のデザイナーを紹介する展覧会を2011年、2013年に開催しました。アジアのデザイナーが作ったポスターを展示するだけでも面白いと思うんですが、デザイナーとデザイナー、あるいはデザイナーとデザイナーではない人との交流を深めるような場所作りを、この頃から始めました。

昨年は、京都に移転した ddd ギャラリーでさらにアジアのデザイナーと、印刷会社や写真家、イラストレーター、デザインにまつわる上流から下流までいろんな人を扱う展覧会を行いました。そういうことをまとめて、昨年、オランダ・ロッテルダムにある建築とデザインの美術館でアジアのデザインに関するトークに登壇しました。アジアのデザインに関する団体やネットワークを作ろうというのではないんですが、ゆるやかな横のつながりを作っている人間だと理解していただけたらいいかなと。雑誌の連載をしたりもしています。

こういった活動とはまったく別で、話をする会のようなものも行っています。「モバイルトーク」は一昨年、運営を担当している大阪府立江之子島文化芸術創造センターの向かいにあるマンション1階のスペースの初期の活動として開催しました。アジアのデザイナーや編集者、キュレーター、建築家、メディアアーティストが集まる会です。いろんな人たちが集まってつながりを作っていこうということをやっています。大阪だけではなくて、台湾、香港、東京、シンガポールなどで継続的に行っている活動です。展示やトークで人が集まってつながるような場所を作るというのを、デザインと並行して行っています。

配布したチラシ「アイデンティティのキキ」は、あまらぶ A-Lab で来月行われる展覧会のものです。美術館、アートセンターのビジュアルアイデンティティ (VI) をテーマにした展覧会です。デンマーク、オランダ、フランス、東京のデザイナーと一緒に作っています。きっかけは、あまらぶ A-Lab で展覧会をやりませんかという話があり、ポスター展などを期待されているかとも思いましたが、せっかくアートという名前がつくところで、デザインにすることができれば、踏み込んだことをやってもいいんじゃないかと。体裁としては、あまらぶのロゴを作り直すコンペを勝手にやるという展覧会です。今日は菅谷さんが来られているの

で言いにくいですが、中之島新美術館の VI コンペがあって、公募に出しました。2 次審査くらいで落とされた案をこっそりこっちで出してみようと。同じ案をもう一度こちらで使ってみようかなというのが元ネタになっています。

どうやって選ばれているのか、どうやってデザイナーは形を作っているのかということを、ちょっとだけ開示するような展覧会を作ろうと思っています。これにあわせて、関西のアートセンターや美術館に誰がデザインしているのかや、どういった経緯で依頼したのか、いくらくらいかかったのかをアンケートをとっています。7 館くらいから協力いただけました。面白いのが、ほとんど記録が残っていない、担当者が調べないとわからないとか、10 何年前のことなのでわからないとか、けっこうぞんざいに扱われているのが面白かったです。それも何らかの形で会場に展示をします。

最後は、此花区にある「The Blend Inn」という宿泊施設です。ブレンドアパートメントというアーティスト・イン・レジデンス (AIR) のスペースも持っていて、昨年度文化庁の助成で AIR の事業を行いました。私はそこに審査員として加わりました。フォーカスをドイツにあてて、一年間で 4 組のドイツのアーティストやデザイナーに滞在制作をしてもらいました。具体的には大学生から、プロとして活躍しているアーティストまでいろんな人たち 4 組を紹介しました。来月にはまとめた冊子を「The Blend Inn」に置いてもらいますので、興味のある方はご覧下さい。文化庁の助成は 1 年で終わりましたが、ブレンドのオーナーが活動に面白さを感じ、興味を持ったので何らかの形で今年も続けようとしています。

ドイツのハンブルグの大学と私のゼミが交流しています。チラシのデザインをしてもらったりしています。ドイツとのつながりも、中塚さんの資料にある 2005 年の ART-EX のストウーケ、ジーバー。当時から 15 年ほど仲良くしています。彼らはデュッセルドルフ出身で、そこの交換レジデンスをしたりもしています。今年もデュッセルドルフの団体から渡航費などを出すのでアーティストを送って欲しいと言われています。こういったことも公開していきますので、またご協力いただければと思っています。

中西： ありがとうございます。ラオさんお願いします。

シーズン・ラオ： シーズン・ラオです。私は作家です。大阪で 2015 年から開催されている「UNKNOWN ASIA」の審査員を 2017 年から務めています。2019 年 10 月にはグランフロント大阪で開催されました。5 年目の去年は 290 組のアーティストが集まりました。アーティスト・フェアはクリエイターやアーティストが主体となって、ギャラリーではなく、自分で応募し、出展するものです。おそらく、日本最大規模じゃないかと思います。海外でも話題になっていて、日本の大衆文化やポップアートなどが世界にも影響を与えています。



シーズン・ラオ

審査員は現役のキュレーター、ギャラリスト、美大の方、海外のデザインウィーク主催者、日本のファッションブランド、広告代理店などいろいろな方に審査していただけます。ビジネスマッチングも行われています。イラストレーターや商業写真家なども参加し、デザインやサブカルチャー、アートの中間のような新しいフェアの形です。「UNKNOWN ASIA」に興味がある方はホームページをご覧ください。私が審査員として「UNKNOWN ASIA」で選んだ作家をマカオで紹介しています。こちらは去年私が賞に選んだ作家葉栗里のマカオ企画展です。

また私は普段、現代美術の作家として活動しています。8年ほど北海道に滞在して、東洋哲学の精神性を通じて、自然現象の白雪と雲から「間（余白）」に結びつける作品を作っています。ホームページ（www.season-lao.com）にも情報があります。

作家活動に関して、アートフェアのことも紹介したいと思います。こちらはギャラリーから出展している国内外のアートフェアの様子です。この写真は去年上海で行われたアートフェアで、私の作品の右はダリの版画、左側は日本ではまだ馴染みがない周春芽という作家の作品です。彼はオークションで2013年に総売上高約73億円（RMB 4.7億）で落札された記録があります。中国のバブル経済にも大きく関わっているようです。アートフェアでは、市場と繋がっている様々な国と時代の物を見ることができます。こちらはコミッションワークでホテルにコレクションして展示された様子です。またアメリカの美術館、マカオの大学ホール、お寺で行った展覧会です。現在京都のギャラリーでも個展をやっています。興味のある方は、ギャラリー白川（シーズン・ラオ「氷蓮図」× ソル・ルウィット展 / 2020年1月18日-2月16日）をご覧ください。

現代美術では本質を考えることが大事です。こちらは北海道の伊達市から講師としてお声がけ頂いたワークショップです。私は地元の方に、写真のメディアとしての扱い方やこの土地の見え方を表現してもらいました。「北海道・北東北の縄文遺跡群」は世界遺産への登録を目指しています。そのような土地で皆さんのアイデンティティを考えていただくことで、まちのアーカイブとなります。

中西： ありがとうございます。後藤さんが海外へ出ておられる一方で、ラオさんのように海外から日本へやってきて活動を広げている人もいます。その一端が見えたかと思います。次に、宮本さん、木坂さんの仕事はアーティストやデザイナー、アートの周辺も含め、動いているシーンの中でどういった場作りをするのか。前半は美術館の視点でパブリックでどう動くかという視点でしたが、民間の立場からどういった場作りができるのかということ、積極的に取り組んでいるお二人です。宜しくお願いします。

宮本典子： みなさんこんにちは。宮本と申します。私は、一般社団法人日本現代美術振興協会と、個人事務所 office N というところで二足のわらじ、二つの所属で活動しています。ほとんどが、社団法人の活動です。その中の一番のメインである「ART OSAKA」についてと、「ART OSAKA」が過去に行ってきたことを紹介します。今回「海外に拓く」



宮本典子

を一つの切り口ということだったので、「ART OSAKA」で行った海外とのプロジェクトを中心にお話します。

日本現代美術振興協会という名前を初めて聞いたという方も多いと思いますが、実は前身が「ART OSAKA 実行委員会」という、ホテルを使ってアートフェアを開催してきた団体です。2018年に法人化し、日本現代美術振興協会となりました。私たちのミッションは、以前はアートフェアが主でしたが、法人化したことで、関西において年間を通じた現代美術に関する活動をしています。アーティストと一緒に何か面白いことをやっていこうというところにミッションを移して動き始めているところです。

「ART OSAKA」は意外と歴史が長くて、2002年に海岸通ギャラリー・CASOでスタートしました。2007年に堂島ホテルに移り、2011年からホテルグランヴィア大阪に移り、そこで10年近く開催しています。今年は、2020年6月26日から28日に開催します。毎年7月上旬をめどに開催しています。「UNKNOWN ASIA」は来場者が約1万3千人ということで、すごいなと思いましたが、「ART OSAKA」の来場者は近年3000人前後で推移しています。ホテルを会場としたアートフェアはどんなものかということ、1室1ギャラリー、3日間限定の展示販売を行います。

基本は、アートフェアとして現代美術のギャラリーが、3日間作品を展示し販売する。一般のお客様が見て、値段のついている作品を買うというイベントです。並行して、トークイベントなども開催しています。2019年は「アートセンターの未来を考える」と題して、神戸アートビレッジセンターや、京都芸術センター、大阪府立江之子島文化芸術創造センター、新しく開館する宝塚市立文化芸術センターの方々にお集まりいただき、各センターのあゆみや課題について2時間弱くらいのトークをしました。企画は理事の加藤義夫が担当しました。2018年には、菅谷さんにもご登壇いただきました。関西の美術関係者などにご協力いただいて、フェアはマーケットが中心ですが、それだけではないアートの社会的側面を明らかにするようなトークを毎年開催しております。

次に、「ART OSAKA」が過去に行ってきた海外との関係について。実は、近年はそれほど積極的にできずにおります。2013-2015年にかけてアンスティチュ・フランセ関西の協力をいただいて、フランスのアーティストを日本に呼んだり、日本の作家をフランスに派遣したりという小さなプロジェクトをいくつか実施しました。一つは、フランスでは50年以上続く、実績のあるアーティストによる現代美術集団（NPO）が毎年秋に「Jeune Creation」という公募展を行います。そこに「ART OSAKA」枠として鈴木悠哉さんを派遣し、展示をしました。

翌年は中島崇さんというインスタレーションの作家を派遣しました。どの作家を派遣するかは、「ART OSAKA」の開催中にアンスティチュ・フランセの文化担当者に審査いただき、大阪の出展作家から選んでいただきました。公募展だけでなく、「Jeune Creation」は通常、モンマルトルの近くにJeune Creationギャラリーというスペースを持っていますので、そこでの展示も行いました。現地の日本人キュレーターにも協力いただいて、南俊輔さんやmarianeさん、三宅砂織さんの展覧会を開催しました。

反対に、フランスの「Jeune Creation」に関係する作家の作品を、「ART OSAKA」で展示しました。Lucie & Simon という男女のペアの映像と写真作家の作品を展示しました。この時は、大阪市の芸術活動振興の助成金を頂戴して実現することができました。トークイベントも「Jeune Creation」の関係者などと開催しました。

アートフェアは世界各国でたくさん開催されています。ホテル型のアートフェアはアジアを中心に、なんというか、ブームになった時期もあり、「ART KAOSHIUNG」という台湾の南にある高雄という都市と提携して、相互プログラムを実施しています。実際に台湾で日本人の作家を紹介しています。「ART KAOSHIUNG」では若い作家を紹介することもやっています。

日本でアートフェアはどちらかというと商行為と結びついているので、なかなか公的な支援を受けにくい。ですが、アジアの他の国では行政をあげて、町ぐるみでアートフェアを盛り上げていくような形があるのが、大変羨ましいと思うことが多々あります。「ART KAOSHIUNG」では日本人コレクターを連れて行って、台湾のコレクターとの交流も行いました。

私たちは、「関西ギャラリーマップ」という、関西にある現代美術の企画ギャラリーを紹介するウェブサイトの運営もしています。年間を通した現代美術の展覧会等の活動をしていこうというミッションを掲げたので、昨年の秋には「イケフェス大阪」と連携しまして「まちと生きる現代アート」展を開催しました。文化庁の事業を受託して、「Exploring 展-共通するものからみつける芸術のかげら」という障害のある方の作品と現代美術の作品と一緒に展示する展覧会も行いました。

冒頭でお話した office N という個人の活動では、「capacious」という大阪府内の障害のある方の作品を、マーケットで紹介するプロジェクトをしています。2018年から大阪府の事業として行っています。以上です。

中西： ありがとうございます。このまま木坂さんお願いします。どの方もまさに今、活躍しておられるのですが、その昔に出会った時はアートボランティアの大学生だったり、フリーペーパーを作っているけどお金が無かったり。そうやって10年、20年と経って、今がある。そういったことも感慨深いです。

木坂葵： みなさんこんにちは。おおさか創造千島財団の木坂です。千島土地株式会社および、おおさか創造千島財団はアートを軸としたまちづくりを行っています。我々の活動は拠点である大阪市住之江区北加賀屋の遊休不動産を活用したハード面の芸術環境整備のみならず、アートがまちに根付き、外へ広がっていくようにソフト面での芸術文化支援を同時に



木坂葵

行っています。本日はその一部をかいつまんでご紹介します。

お手元に配布した青いマップ (<http://www.chishimatochi.info/found/news/3659/>) では、北加賀屋の遊休不動産を使った施設を紹介しています。ギャラリー、飲食店、個人利用のスタジオなどを含めると、現在創造活動拠点が約40箇所あります。

まず、〈創造環境の土壌整備、クリエイションのための場作り〉をしています。名村造船所跡地は、我々が展開しているアートによるまちづくりの原点と言える場所です。長く休眠状態でしたが、芸術関係者との出会いがあり、2004年9月にこちらを舞台として、新しい芸術について考えるアートプロジェクト「NAMURA ART MEETING'04-'34」を開催し、数百人の参加者が、芸術の可能性や未来について語りました。翌年2005年に、元事務所棟を改装して「クリエイティブセンター大阪」というスペースをオープン。4階のドラフティングルームと呼ばれる場所には、原寸大の船や橋脚の図面跡が残っています。

次に、〈鑑賞機会の創出〉です。水都大阪2009の開催当時、水の都のフェスティバルでありながら、シンボルとなるアート作品がないということで、オランダのアーティスト・ホフマンによる作品を千島土地株式会社が購入しました。地域連携企業ということで展示しました。このラバーダックという作品は、みなさんに「あひるちゃん」という愛称で親しんでいただき、今は我々の会社のアイコンにもなっています。

それから、〈鑑賞機会の提供+アーティストサポート〉として、北加賀屋にはMASK（メガ・アート・ストレージ・キタカガヤ）という大型作品を見せる収蔵庫を運営しています。アーティストの作品を無償でお預かりして、無償で一般に公開しています。国内外の美術館から展示依頼がある作品を我々は所蔵しています。MASKの開設には大阪市の助成をいただきました。ありがとうございます。

MASKの他、2018年に「モリムラ@ミュージアム」という森村泰昌さんのプライベートミュージアムをオープンしました。元は家具屋の倉庫兼オフィスでしたが、1階を森村さん自身の倉庫としてお使いいただきながら、2階をミュージアム、大きなギャラリーのような場所として展開しています。

〈制作機会の創出+よりカジュアルなアート体験〉では、身近にアートに触れるきっかけとして、千島土地の所有物件に壁画を作っています。壁画のよいところは、時期や時間を問わずいろんな方にみていただけることです。壁画は現在大小合わせて20数個ありますが、海外アーティストが多いです。いろいろな方を紹介いただいて、少しずつ増やしていきました。2017年の流行語が「インスタ映え」でしたが、この時にインスタ映えする壁画をサーチするアプリの開発業者から、これらの壁画を載せないかと依頼があり、半信半疑で掲載したところ、写真を撮りにまちを訪れる人が急増しました。

最初は若い方でした。週末には大きい壁画に列ができるくらいです。インスタで「#北加賀屋」「#北加賀屋アート」と入れると、いろいろな画像が出てきます。中高生から子供連れの主婦、カメラ好きのシニアまでたくさんの方に来ていただいて、地元の人も「あっちゃで」と案内してくださったり。最初は写真を撮っていることに驚きましたが、最近では見慣れた光景になりつつあります。

これまでは主にハード面でのアートサポートの紹介でしたが、それ以外でも千島財団では公募助成や大阪のアートイベント情報を掲載するウェブサイトの運営などを行っています。2019年からはパリのシテ・アンテルナショナル・デ・ザールという世界最大のレジデンス施設にアーティストを派遣するというプログラムを実施するなど、ソフト面でのサポートも多く行っています。今は画廊に所属して食べていけるアーティストはごく一部なので、アーティストは自分から積極的にキャリアアップする手段として、レジデンスに応募する方が非常に多いです。今年度のレジデンスプログラムの採択者は山村祥子さんです。4月までシテに滞在していらっしゃいます。

<ネットワークづくり>という点では、財団の公募助成の枠組みで支援している、大阪在住の2名の男性アーティスト、「TRA-TRAVEL」がとてもアクティブです。彼らはLCC圏内を行き交うアーティストたちとのネットワークをつくっていて、展覧会やトークなど、さまざまな場所でいろんな形のイベントを行っています。現在は、京都芸術センターで展示をしていますのでぜひご覧ください(TRA-TRAVEL「ポストLCC時代の」 / 2020年1月11日 - 2月16日)。彼らの拠点は北加賀屋の「Osaka Art hub」ですが、北加賀屋から外に発信するだけでなく、彼ら自身もLCCを使って台湾やフィリピン等でレジデンスをしています。自分たちが海外に滞在してネットワークを作って、北加賀屋に持って帰るといった動きも作っています。

最後に、<作り出す場づくり、交流点の創出>について。現在準備中のシェアスタジオ(SUPER STUDIO KITAKAGAYA)が3月29日にオープンします。北加賀屋の環境整備の一つですが、大阪に10人強のシェアスタジオはないのではないかと思います。アーティストが集まって交流する場としてうまく機能させたいと思っています。

我々の活動は一言で言うと、アートを軸としたまちづくりです。活動初期はハードを整えたり、作品を設置するというシンプルなものでしたが、その後、自分の拠点を構える人や住む人、作品を作る人が北加賀屋に集まり、それに対して状況に応じた支援を行うことによって循環がおり、発信され、北加賀屋に作品を見に来る人、写真を撮りに来る人などさまざまなリアクションが生まれています。この活動は今年で16年目になりますが、国境を超えた循環や地域のイメージ向上や、流行化を産んでいます。

中西： 4者4様でもっとお話を聞きたいという方もいます。たくさんの情報が入ってきて、今年はこれに行ってみようという方もいるのではないのでしょうか。先ほども言いましたが、いきなりこの状況があるのではありません。先ほど美術館ができるまでにコレクションを集める、大阪府のさまざまな事業がある。一方で、助成金での活動がある。その中でみなさんそれぞれの活動があります。

こんな大阪で10年後、どうなっているんだろうということを聞いてみたいと思います。みなさんへオファーした際に、宿題を出していました。自分の10年を振り返ると、10年後なんてあっという間だというのが実感ですが、10年後こんながあったらいいな、でも足りないのはこんなことという2つの質問に分けていましたが、どんな形でもいいので、こんなことしてみたい、こんなことしようと思っている、野望やささやかな夢を教えてください。

宮本： 考えている途中ですが、先ほどのお話や、中塚さんの年表で見ると、私がお大阪でアートにかかわり始めたのは2007年頃からです。ちょうどその頃から、大阪の現代美術の府や市の事業、とくに若手や中堅をフューチャーするような事業が収縮している、減少傾向にある時期と重なっています。私は、ないのが当たり前の状況にいたんです。やっぱり10年後は、それがあってほしいと思います。5年ほど前に、後藤さんともっとこんなことがあったらいいねと話をしました。AIRなどが大阪には全然なくて、すごく寂しいと私は思っていました。でも「ブレンド・アパートメント」でそういう活動を始めておられる。5年前にあったらいいなと思っていたものが少しずつできてきていて、すごいなと。ブレンドは民間なので、AIRみたいなものが、もう

少し行政的にも必要だという方向になってほしいという思いがあります。若手中堅作家に大阪で活動していくための未来、希望があるようなプログラム、施策があったらいいなと思います。

後藤： 宿題は完全に忘れていたんですが、、、。ストウーケ、ジーバーという2人の写真家が日本へレジデンスに来ていた時に、仲良くなりました。僕は美大の出身ではないから、美術の人との接点を持ったのが初めてで面白かった。こういったものごとの見方があるんだとか。そこから興味を持って、10年くらい前に3年ほどフリーペーパーで大阪のアート情報を紹介していました。最初の経験で、レジデンスはそういう人と出会って面白いという原体験があるから、それをずっと続けています。10年後の願望としては、行政に頼らなくても自分でこれくらいの金だせるぞとなっていたら一番いいなと思いますが……。それは願望にすぎないので、そういったことが行政でやってもらえたりとか。あるいは、そういうことに意味があると思ってくれる人が増えて、レジデンスの運営に関わる人たちがもっと増えるような状況があってほしい。レジデンスの効果が見えづらいとか、効果があるかどうか証明できないのが行政にはハードルになると思いますが、それがベースになって現実につながってきて今があるので。何か直接的に花が咲くではないけれど、種を蒔けない今の状況が変わるといいなと思っています。

中西： ありがとうございます。種が蒔けないと言いながら10年後はこうありたいというのがあるので、どの方も、これからも大阪に関わっていきたいという思いがあるのかなと。ラオさん何かアイデアはありますか。

ラオ： 今回、声をかけていただいて非常に光栄です。作家の立場から無責任に言います。最近、私は京都にいたことが多くですが、伝統的なものが多いと感じます。大阪は歴史的に商人の街で、いろんなものが集まりやすいところです。現代美術における抽象表現主義は、日本では1950～60年代から始まった具体美術集団が知られていますが、これは関西で起こりました。世界の戦後美術において重要なムーブメントとして認められています。ちょうど先週、台湾で「台北當代」アートフェアがありました。アジアでは香港「アートバーゼル」の次の規模です。具体美術の作品も出展されていました。関西は世界レベルの具体美術を生んだ。大阪は可能性が高い街だと思います。

モダンアートはヨーロッパが中心でした。現代美術（コンテンポラリーアート）はアメリカが中心。日本は歴史伝統をもつ国であり、現代美術より、職人文化が強いです。職人的なものから、造形的なものが多く、背景には精神性があると私は感じています。これまでの工芸職人的な作品にとどまらない時代を拓く新しい表現、精神を高めているものが、コンテンポラリーアートの次の時代につながるものとして誕生するかしないか。私たちは先人の仕事をまねするだけではだめで、自分の時代があります。今の世界を次の世代にどうつなげていくかを考えないといけません。

日本はとても素晴らしい禅的な世界があります。以前から欧米の有名な作家もそれに魅せられてきました。ジェームズ・タレルは天井を四角く切ったりして禅の世界を取り込む作品を作りました。現在日本のアートマーケットは元気じゃないと私は感じていますが、いい物はちゃんとあると分かっています。香港の国際マーケ

ットの「アートバーゼル」と、台湾のフェアのように、これから日本にも昔のバブル時代のような、大きなチャンスが生まれるのではないかと。2025年には万博があって、世界中の人が集まるいろんな取り組みがあるから、今後10年のうちに素晴らしいものが生まれる事を楽しみにしています。

中西： ありがとうございます。木坂さん。

木坂： 千島土地では、北加賀屋でしかできないこと、船や川などを使ったダイナミックなことをしてみたいと考えています。それは10年後とはいわず、今後できたらいいと考えています。3月にオープンする「SUPER STUDIO KITAKAGAYA」でも、レジデンスを実施したいと思っています。オープンコールに手一杯で今はできないので、どんな形になるかわかりませんが、寝泊まりできる部屋とスタジオがありますので、そこでレジデンスを初めて、人が来ることで広がり無限大になるんじゃないかと考えています。

あとは、大阪でこんなのがあったら面白いんじゃないかと思うものですが。私が直接見たわけではないですが、フランスの「ニュー・ブランシュ」でやっていたイベントで、高速道路を夜の7時から朝の7まで封鎖して、そこでみんなでサイクリングをしたり、フードトラックがきて、いつもは車しか通れない場所がみんなの遊びの楽しい場所になる。アーキテクトのプロジェクトでしたが、一夜限りのイベントとしてやっていて、ものすごく驚きました。高速道路をアートイベントのために使えるなんて、なんというダイナミックさだろうと私はすごく驚きました。公共空間の使い方という話になるかもしれませんが、そういうダイナミックなこともアートという枠組みでやって、みんなが楽しくなったり驚かせたり、やっぱりアートって面白いねっていうような企画が大阪でできたらいいなと個人的には考えています。

中西： ありがとうございます。あと5分ほどあるので、お互いに何か聞いてみたいことがあれば。今までの話では、キーワードは「交流」という言葉だと思います。お金の話を遠慮なくするのも大阪らしいかもしれません。この際なので言葉を足したい方は。

木坂： 宮本さんとラオさんに。ホテル型のアートフェアがアジアで一時期流行っていた、その理由はなんでしょう。

中西： 泊まれるからですか？

宮本： いや、発祥は「ART OSAKA」ではないですが、流行ったきっかけは実は「ART OSAKA」だったと言えると思います。台湾へ行ったときにも、「ART OSAKA」の真似をしてやり始めたと聞いたので。ホテルでやるという発祥はNYらしいと聞いたことがあります。お金がないからホテルでやる。広い国際会議場のようなところを借りて壁を立てると会場費と施工費にお金がすごくかかります。それが出展費に跳ね返ります。

すると、その分の売り上げが見込めないギャラリーは出展できない。でも、日本にはそんなにマーケットがないので、節約方法として、もともと壁があるホテルを会場にやりはじめた。

NYでも若いギャラリーや、資金力がない小さなギャラリーが面白いものを見せたくてやり始めたという発想です。アジアでそれが流行った理由は、ちゃんとわからないですが、台湾・韓国・香港などでもやっています。日本よりはマーケットがきちんとあるけれど流行っている。一つは親密さがあると思います。本当の富裕層、億万長者だけでなく気軽にアートを取り入れようとする人たちが、自宅にアートがあるスケール感で作品を見られるというのが、すごく受けたのかなと思います。

ラオ： 作家の目線から話します。日本のアートフェアは、「アートフェア東京」以外は全部ホテルで開催されます。宮本さんがお話ししたように、ホテルのほうがギャラリーが負担しやすい。加えてホテルではグループ展ができる柔軟性もあり、一部屋ごとにギャラリーの方針をはっきり提示できます。

「アートバーゼル」のような大きいアートフェアは出展料だけではなく、個展中心であったりギャラリーが作った歴史、売り上げなどといった審査が厳しいです。またアートマーケットは巡回しているものなので、既に市場に入っているものだけではなく、どうやって次に歴史を作る作家の作品を見いだすのか。そういうことも目的の一つです。そのため、それぞれ枠を変えて、海外のブースフェアとホテルフェア、両方に出展しているギャラリーもあります。

中西： 時間が来てしまったので中途は半端な感じですが、次に4部で話します。「交流」「滞在」がアートの分野においてとても重要であることが改めてわかりました。お金の話も無視せず真剣に、大阪のアートを応援したり生き延びていきたいという状況の現れだと思っています。それに対してできること、整えられることがたくさんあるのではないかと思います。この場だけでお金の話をしているのではなくて、もっといろいろながれるし、海外のアーティストとの交流、障害のある方の作品を展示するなど、いろんな広がりがあるのが4人の活動紹介だったと思います。



会場風景

16:00～

テーマ:

第四部 「大阪の美術を拓く」

○司会 : **中西美穂** (大阪アーツカウンシル統括責任者)

○登壇者: **木坂葵** (おおさか創造千島財団事務局長)

後藤哲也 (グラフィックデザイナー/近畿大学文芸学部准教授)

小吹隆文 (フリーライター)

シーズン・ラオ (アーティスト/UNKNOWN ASIA 審査員)

菅谷富夫 (大阪中之島美術館準備室室長)

中塚宏行 (大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課研究員)

宮本典子 (一般社団法人日本現代美術振興協会事務局長)

山中俊広 (インディペンデントキュレーター/大阪アーツカウンシル委員)

中西: 第4部をはじめます。第1部の方から感想や質問をお話いただいて、都度質問に答えるのではなく、まとめて回答の時間を設けます。次に第2部、3部の方も同じように進めます。長く話しすぎないというのルールです。山中さんからお願いします。

山中: 私は今日、大阪アーツカウンシルの委員として発表しました。普段現場では3部のみなさんとよく似た立場の活動、仕事をしています。シンポジウムのタイトルには「美術」「アート」が併記されていますが、言葉の意味だけでは測れない「表現」「活動」の展開があると感じました。みなさんそれぞれの仕事を、一つの言葉では語りきれない。そういった動きがないと、最先端のものは創れないんだなと感じました。



会場風景

小吹： 私は、仕事を通して美術とかかわるようになって30年くらい経ちます。その間、状況の変化はいろいろありました。美術関係者はだいたいいつも不満を言っています。その状況をわかりながらも、今日のいろいろなお話を聞いて、なんだかんだ30年経って、特に美術家の生き方に選択肢が増えているのは間違いないと思っています。スピードが早いか遅いかは別にして、着実に進展していると思いました。

菅谷： 3つあります。今週月曜に京都府新鋭選抜展の審査をしました。京都の美術大学や、京都で発表している若い人たちの展覧会です。プロフィールを見ると、大阪出身者が多いんです。大阪出身で京都の美大・芸大で勉強して、京都でそのまま活動している人。どこで生まれたかは関係ないんだけど、もったいないなという気がしました。作家が大阪で生まれてよかったと思えるような何かがあるべきだろうなと思っています。

2つ目。3部のみなさんの中には、昔からよく存じ上げている方もいます。大変な中で息長くがんばっていらっしゃるなと素直に思いました。中之島美術館の開館準備が長い期間続いているのは、私が粘り強いわけではなくて、大阪市が粘り強いだけです。私自身は飽きっぽいのでよくもったなと。なので、本当に素直に継続してきているみなさんはすごいなと思いました。

3つ目。レジデンスの話がありましたが、新しい美術館でも何か連携できたらいいなと、今思いつきました。お金はどこから作ってこなくてはいけないので、そういうことも含めて考えられたいなと思っています。

中塚： 第3部の4名の方に伺いたいのは、「美術 / アート」の活動を続けるにあたって一番大事に思っておられること、今後やりたいこと一つずつお話しいただきたいと思います。

中西： ありがとうございます。大事にしてきたことと、わりと近い今後について。

中塚： 後藤さんから。

後藤： 大切にしていることは、レジデンスなどでアーティストを招くときは、限りある予算とかホスピタリティとはまた別の部分で、お互いに何かよい結果を得られるような、関係性をどうつくるのかを意識しています。デザインをどう作るかといったこととの関係性。毎回、対象と、自分と、自分がやることをどう関係付けるかを意識しています。今後やってみたいのは、菅谷さんがお話されたように、新しい美術館や北加賀屋の活動など、大阪で起きているいろんなこととつながれるようなことができればと思います。

中西： 後藤さん質問があれば。

後藤： お会いするのは今日が初めてでしたが、中塚さんに質問します。以前新聞でみた中塚さんの記事が面白かったです。例えば、いろんな状況があって、コレクションをいろんなところで展開しなくてはいけないという活動自体にも興味があって、尊敬しています。逆に、バブル期とか潤沢に予算が、今も続いていて、なんでもやっていいと言われていたら、どんなことをされていたのかを伺ってみたいです。

中西： 中塚さん、ちょっとその答えは考えておいてください。あとで聞きます。木坂さんお願いします。

木坂： 財団として継続で大事にしていることは支援です。今どんな支援が必要なのか、支援のあり方をいつも考えています。公募助成の内容を常に変えていったり、新しいプロジェクトを進めたり。いつも大阪のこと、今のアートシーンの状況などを考えています。今後は、「SUPER STUDIO KITAKAGAYA」がオープンしますので、みなさんに来ていただき、見てもらい、使ってもらい、大阪のアートシーンの礎となるようにがんばっていきますのでよろしくをお願いします。



会場風景

中西： 質問はないですか？

木坂： 感想でもいいですか。第1部で大阪市の助成金の傾向についてお話がありましたが、アーティスト主体による活動が増えている、それに対するサポートが増えているということ。小規模企画で最大20万円の補助。それに対してアーティストは今、いろんな能力を必要とされているのではないかと思います。自分自身の企画だけじゃなくて、まずは作品のクオリティをあげる。加えて、セルフプロデュースとか、海外へ行くとか、営業・広報・コミュニケーションと人間力がないとやっていけない。それくらい大変な状況だと思います。それに対して、助成が施しではなくて、彼らの活動をサポートする支援でありたいと思いました。

ラオ： 作家としての活動を継続することが一番です。マカオはとても小さい街ですが、中華と西洋の入り混じった文化があります。私は、マカオ、人口が60万人しかいない街で生まれました。資本主義と現代の中国

式社会主義の間にある街で、色々な視点を持つ事ができます。ポルトガルの大航海時代には南蛮貿易で日本と縁がありました。自分も 20 代の頃、偶然ご縁があり、お世話になっている日本との文化の架け橋となる活動も続けたいです。意欲的にできることがあればやっていきたいと考えています。

東洋では工芸など自然と調和する哲学を持っています。でも今私たちが生きている時代は、近代化を経た後のグローバリズムの中で、自然を支配する社会です。北海道にいた頃、東日本大震災がありました。原発の問題があったり、世界中どここの国でもそういうことが起きている。それをどう解決しようかと考えたときに、東洋美術の、人間と自然が調和していけるという考えが重要だと思っています。そのように考える作家もいますが、今の評価システムは、どちらかというと西洋美術の評価基準が中心になっていると思います。だから我々は革命的なことをやっています。小さい作品をつくりながら、何も考えずにつくるのではなく、自分のルーツや経験から、次の世代に何を残すのかを考えています。

質問は、中塚さんに。中塚さんは、北海道の美術館で長く勤めておられた。大阪のコレクションの知識もお持ちで、北海道の美術関係のご縁も深いことと存じます。北海道の歴史は 160 年（2018 年が北海道命名 150 周年だった）ほどですが、今後関西と北海道の(美術・アート)の交流予定はありますか？

中塚： 交流ですか。私は北海道の美術館に 16 年いました。その間に札幌、旭川、函館と 3 つ美術館ができました。戻ってきて大阪では一つも美術館ができなかったという状況です。北海道にいと、どうしても、美術の中心は東京・大阪・関西という視点が強いです。もちろん北海道内の中心は札幌ですが。そういう意味で、北海道の美術はあまり東京や関西で知られていない。でも優れた作品がたくさんあると 16 年かけて知ってきました。本当は、そういう作家や作品を東京や関西でも紹介したいが、実際にはニーズがあまりないのが現実です。

北海道にいる間に、北海道の美術や重要なコレクションを、時々東京や大阪で紹介したことはあります。それは北海道のコレクションの出前のような感じです。大阪でも、ナビオの美術館があった頃に、ナビオでいくつか展覧会をしたり、しかし、断片的なままでとどまっていました。どうしても、関西からみれば東京が中心ですが、関西と東京以外から見ると、東京・関西は美術の中心地です。その中心がどこを見るかという海外です。あまり地方には目も足も向かない。美術というものが一体何なのかということを考える必要があるのではないかと。現代美術を考える場合には、ヨーロッパ、アメリカ、ベネチア、ドイツのドクメンタなど欧米の国際展に目が行きがちである。それが、日本の現代美術の傾向にあります。ある意味では仕方がないですが、それだけでは問題があると時々私は思っています。

中西： そうですね、中塚さん。あの、そのまま、バブルがはじけなかったらという質問の答えもお願いします。

中塚： バブルがはじけなかったらという質問ですが……。 「大阪トリエンナーレ」は、その後に始まりました「横浜トリエンナーレ」や「越後妻有（大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ）」、最近の「あいちトリエンナーレ」に比べるとほとんど知られていないです。その原因は、展覧会のやり方や同時代性を欠いていた部分が無いわけではない。そういう意味ではそれがバブルの産物だったという側面がなきにしもあらずです。

大阪トリエンナーレはコンクールでしたが、賞金が、グランプリ 1000 万円、銀賞には 500 万円。受賞した作家は 1000 万円の賞金を得ていた。現在展示されているタイの 20 代の作家は 1000 万円の賞金を手に入れた。ルーマニアの彫刻家もそうです。中国の作家も 500 万円。その当時の外貨で換算すると、かなりの金額が各作家にわたっている。そういう意味ではバブル的な部分が相当あったと。それによって、ある程度、関西の現代作家も潤った人たちもいましたが、トリエンナーレのあり方自体に反対していた人もかなりいました。そういう人たちには恩恵がなかったかもしれません。

展覧会のあり方自体の問題はあったかもしれませんが、バブル的な面もあったのではないかと。トリエンナーレを開催した結果がよかったかどうかはわかりませんが、もう少しやりようを変えれば、当時の旬の作家をコレクションできて、府のコレクションも今以上に充実していたかなという反省もあります。

中西： ぐるっと回って話がわからなくなりそうですが、宮本さんが継続していく上で大切にしていること、今後やってみたいことについて。質問があれば質問も。

宮本： 活動を続ける上で大切にしていること。できることを精一杯やるとか。精神論のようになってしましますが……。 「ART OSAKA」で私たちが直接やりとりするのは作家ではなくギャラリーで、ギャラリーを介して作家と付き合っている状況です。基本的にはギャラリーの意見ができるだけ柔軟に聞けるような姿勢でいます。そもそもアートにかかわっている人はみんな、作家が何かを生み出すから、周りの立場も仕事もある。作家をサポートすると言うのはおこがましいですが、作家が何かをやるために、その場をいかにつくるのかを大切に、原点回歸して、そういう姿勢でいようと思っています。作家の思いや精神性に作品を通じて触れることが楽しみだったり、そういうところに自分が仕事を続けるモチベーションがあるという面もあります。そういう機会を増やすことも楽しみながら、仕事をしているのが現状です。

今後やりたいこと。課題としては、アートが好きな方、ここにお集まりになっている方は一定レベル以上に芸術文化に関心があると思います。もっと、より広く、新しい観衆、オーディエンスを獲得していくことをやってきたいと思っています。すごく難しいことだと思いますが、そうでないと続かない。民間のサポーター、民間の芸術にお金を出そうと思う方。ギャラリーで作品を販売する場合にも、エンドユーザー、一般の方がアートに対していかにお金を出してくれるかの重要性を感じています。新しいオーディエンス、新しいアートのパトロンを獲得を常にやっていきたいと思っています。

中西： ありがとうございます。みなさんも頭でもやもや思っていることがあると思います。質問や感想を聞くコーナーにしたいと思います。短く、3名ほど。なければ、前大阪アーツカウンシル委員の山下里加さんにお話いただきたいと思います。

山下里加： 山下です。前のお大阪アーツカウンシルの委員の1人でした。先ほど小吹さんと「私たち、長いですね」というお話をしていました。

30年前に小吹さんが『ぴあ』の編集部にいらして、私がフリーランスのライターとして美術記事を書き、関西のアートシーンを見てきました。

アーツカウンシルが声をかけた集まりに、いろんなジャンルの人が壇上に並んでいるの感慨深く見ています。

こうした草の根の活動をしている人たちのネットワークを作るのが重要なのかと思いつつ、なかなかそのネットワークの成果をアート関係者以外に見せていくことが難しい。第1期のお大阪アーツカウンシル時代からの課題だと思っています。

現在の大阪アーツカウンシルへの質問として、これからの人材のネットワークづくりや、それぞれの活躍の場をどう考えていらっしゃるのか。もうひとつは、大阪府市の文化政策の方向性がよくわからない。大阪アーツカウンシルの理念や活動と大阪府市の文化事業が合致しているのかがよく見えないところがあります。大きな話になりますが、例えば2025年の万博と大阪アーツカウンシルはどう関連するのか。個人レベルの話と政策面での話の二つを聞かせていただけるとありがたいです。

中西： 私に質問がきてしまいましたが、他の質問も先に受けたいと思います。

来場者 A： 今日は台北でラオさんにお会いした時に、来て下さいと言っていただいたご縁で、東京から来ました。台北でお会いした時に来て下さいと言うもんですから。台北に27年住んでおまして、長い間アジアと関わり合いがあります。仕事はシンガポール、香港、台北、東京でしております。

アートと街をつくる時に、800m四方の、なるべくビルがない街で古い建物があるところに必要な資金の何割かの補助金を出して、そこでリニューアルした上で安く好きに使ってもらおうということが、まちづくりのポイントになるのではないかと思います。自由に使ってもらえるように、規制も緩和しましょう。東京ではそのようなことを天王洲でやってきました。大阪はそういうところがあるのかないのかよくわかりませんが。

東方文化に関わる財団を設立しました。東方文化とは、西方に対する対抗馬です。アート分野でもいろんな意味で東方とは何かを極める。西方から始まった現代のアートのように壁を飾る、天井を飾るための絵ではなくて、生活の中で生きる、自然の中で生きる東方文化というのは何かを極める。カンファレンスをやったり、いろんなことをやりながら極めるということをやりたい。

もう一つは、トレーサビリティです。スタートバーンと組んで、投資をしているんですが、タグを開発して10万円の絵にタグをつけようという活動を、スリランカや仏教を核にした国で活動をスタートしています。東方文化についてどう考えるかについて、もう一度ラオさんに伺いたい。以上です

来場者 B: 関西に欠けているのは理論、特に批評の分野じゃないかと思います。もう1点はもっとみんな宣伝しないといけないんじゃないか。このシンポジウムを私が知ったのはフェイスブックで3日前に、です。例えば、阿倍野図書館とかを利用するんですが、図書館にこういうチラシは配っていますでしょうか。

中西: ありがとうございます。他はないでしょうか。

来場者 C: 第2部の中塚さんの展示物リストを見て、大阪府内にいろんなアート展示があるというのを知りました。自分の活動範囲では知っていたんですが、こんなにあるんだなと思ったんですね。ここに来ている人たちは美術に興味のある人だけど、たぶんここに来ていない99.9%の人はあんまり美術に興味がなくて、美術館にもそんなに行かない人たちなんですけど。そんな人たちに美術を好きになってもらわないと、なかなか盛り上がり上がらないかなと思います。これだけ大阪府内にあるんだったら、ここを歩くワークショップとかそういうのがあればいいかなと。お金払わず身近で美術が見れる。中塚さんも3月で退職されるなら、その時に説明をするとか。そういうのがあれば、なかなか声をあげると言っても、種をまかないとなかなか声もあがらないかなと思ったので小さな提案です。

中西: ありがとうございます。もう一方。

来場者 D: 初心者に向けて、アートを好きになって欲しいと思って活動しています。アートファンだけでなく、いろんな人に興味をもってもらうことがアートが発展していくきっかけになるんじゃないかと思います。初心者に向けてどういう活動ができるのかを、行政の視点で中塚さん、民間の視点で後藤さん、美術館の視点で菅谷さんにお話を伺いたいです。アートにあまり関心がない人にも広めていくにはどうしたらいいかというお考えをお聞きしたいです。

中西： たくさんありがとうございます。アートツアー、宮本さんと中塚さん、第3部のみなさん。東方についてどう思うか、アジアですか？

来場者 A： 私はアジアという言い方はしていません。東方です。あくまでも東方で、アジアという区切りは西方の人たちが作った区切りなので、我々で東方とは何かということをごきちんと考えないといけない。そういう意味では万博に大阪がどのように関わるかはすごく重要なターニングポイントになるんじゃないかと考えております。常に東方という言い方をしております。

中西： まず私が山下さんの質問に答えます。私は現在2年目、大阪アーツカウンシルの活動を様々な人に支えていただきながらやっております。その中で、とても大切にしていることがあります。それは、登場人物を増やすことです。見える形で登場人物を増やしたいと思っています。限られた予算の中でどうしたらいいのか。例えば、今日や前回の演劇をテーマにしたシンポジウムのように、いろんな人が見えるようなチラシをつくり、こういったことを話したという記録を残すことをやっています。ここに選ばれた人はもちろん活動も素晴らしいですが、そこにいろんな人がつながっているということを重要視しています。また、シンポジウムを通して、ご自身の活動を言語化できている登場人物の一人になっていただいているという考えです。

万博と文化政策ですが、私は2年任期で再任も1回のみなので、もし再任してたととしても万博の時期にはかぶらない。なので、私がどうこうという立場にはないかなと考えています。また、大阪アーツカウンシル全体で扱っている助成金は1年単位でやっていますので、長いスパンで何かを考えられるかということ、まずそういった状態ではない。そんな立場で文化政策にどうかかわっていくかと考えると、まず市民・府民としてです。大阪アーツカウンシルということ以前に市民として、府民として考えることがあり、やれそうなことがあれば、私に限らずやってみればいいやん、と思っています。そういったところが、アーツカウンシルとどう結びつくのかは議論の場が必要かもしれません。また、万博は目標じゃなくてステップだと考えています。実際には芸術活動もアーティストも、もっと長いスパンで活動していくので、それをどうステップにしていくのかを考えてみてはどうかというのを、先日別の場で話しました。

では、東方についてラオさん。

ラオ： ご質問ありがとうございます。東方、東アジアについての私の目線です。私の出身地であるマカオも地理的に含まれますが、中華圏であるマカオは西洋と中国の文化が入り混ざっているところ。とはいえ元々中国文化や哲学のある土地でしたから、それについて学ぶ事もありました。しかし実際に中国を訪れてから、何か違うと感じました。

東アジアは近代化・工業化の過程で西洋的な文化を追いかけて来て、特に中国では文化大革命もあり、リセットされていました。そこで、当時私は自分にとっての東方がどこにあるかと問うと、それは実存よりも理想のものとして存在すると思ったのです。私にとって、初めての東方・東アジアは北海道でした。最初に訪問したのは伊達政宗の一族、巨理伊達家（わたりだてけ）の街である伊達市でした。3万人しかいない街です。そこに行った時に、20年ぶりの大吹雪で、目の前が真っ白になって、利便性を優先している建造物も見えないようになって、その瞬間に、ここは東方があると思いました。なぜかという、余白が出てきたからです。余白は水墨画においてとても大切なものです。雲になったり湖になったりする部分です。日本でいうと「間」の部分です。枯山水も「間」ですよ。余白は人と自然を調和していく、そういう気持ちがあります。枯山水も仏教の中でいう立体マンダラです。そこから想像するのは海や宇宙という余白です。

現代美術についての私の考えは、欧米に追従するものだということです。現代美術、コンテンポラリーアート以前のモダンアートはキャンパスの上に描くという制約がありました。科学的視点をもとに、光、人間の肉眼を分析して、平面には様々な表現をする。第二次世界大戦の頃、芸術の中心はパリからニューヨークへ、自由の国という事を表すように、ジャクソン・ポロックはキャンパスの枠を超えました。抽象表現主義の影響で世界中で前衛美術が流行し、そこからまたコンセプトや方法を用いるコンテンポラリーアートといった、ホワイトキューブの表現に関する理論が中心となりました。いまでもそれに追従する事が当たり前になっているようです。

私の理解には、東方に関してはそういう理論的な考えではなくて、（質問者様が）おっしゃった通り、ライフスタイル、座辺師友です。東方の人たちは自然を眺めながら、土を使った焼き物をお茶碗にして、生活に持っていく。自然を分析し支配するより、共に生きる精神性を高める考えでした。

私が北海道で見たものは東方ですよ。一つの理想郷です。もともと水墨画の世界は、自然の景色を再現するのではなくて、自分の思っている景色。例えば、世の中のもので自分が満足できなくても、山を歩いたら山を描いたり、自然とやりとりをしている。そちらの方が理想郷的な感覚がある。私は、理想郷は自然観とともに高まっていくものだと思っています。そういうことが東方哲学ではないかと思っています。まだ勉強中ですが、今のところはそう考えています。

中西： ラオさん、ありがとうございます。アートのアウトリーチについて指名された方お願いします。

後藤： 今、近畿大学という美術大学でも芸術大学でもない大学で教えています。ものすごく偏差値が高いというわけでもない。その学生たちが美術館に行くタイミングを知る機会があって、最近一番驚いたのが、クリスチャン・ボルタンスキーの展覧会に、意味とかはわからずに写真を撮りたいから行った人がけっこういたんです。ネオンみたいな作品を撮るためです。美術の視点からすると、写真を撮るためだけに来ているというのは、あまりよく思われないんじゃないかと思います。

僕は美術業界の人間ではないので、そういう風に行ってもいいと思います。敷居を下げる考える。そういうきっかけで 1000 人くらいが行ったとして、何人かの人たちが意味について考えると、アートについて考える。あるいは関連した事象について調べることがあれば、そういう人が 100 人に一人でもいればいいのかなと思います。インスタ映えのこともバカにできないと思います。そういった敷居を下げるような企画や接点をどう作るかが大事なかと。

菅谷： 美術館の人間としては切実な問題です。経験上、2 つお話しします。大阪市の美術館として、大阪市内の各区の社会教育担当者にインタビューして全 24 区をまわったことがあります。各区でどんな美術的な活動をしているかを聞くと、ほとんどがしていない。理由の一つが、美術は個人的な活動だからということ。もう一つの理由は、やっぱり美術館とかは敷居が高いですよねと。かならず各区の課長さんなどから意見が出てきました。

先ほどお話しした、心斎橋展示室があった時に、コレクションの中でどの作品が好きですかという投票をしたことがあります。その時に、好きな理由を尋ねると、この作品が美術史的にこういうことで重要だからとお書きになった方は極めて少なかった。どういうものが多かったかというと、今のパートナーと結婚前に始めてデートに行った時にこの作品をある美術館で見た、亡くなった母親と一緒に見たことがあったとか、極めて個人的な思い出と作品が結びついていることが圧倒的に多かったです。

この二つの経験から言うと、やっぱり美術館に来てもらわなくてはいけない。後藤さんもお話しされましたが、美術館に来る理由は美術品がすぐれているからではなく、もっと極めて個人的なことかもしれないと思っています。そういう意味では、美術館に来る理由を、この素晴らしい美術品を知らずにおまえどうするんだ、ということではなくて、やっぱり何かのきっかけ、いろんなきっかけを美術館側が用意する。インスタ映えも一つかもしれない。ジャニーズのコンサートじゃないけど限定グッズが手に入るよでもいいかもしれない。

今までの「美術だから」ということではない、もう少し幅広いところに訴えるような仕掛けを作って、ごはんを食べに行くついでというのでいいし。何かそういうことでまずは美術館に来てもらう。それがきっかけになって何か美術への興味関心が広がっていくんじゃないかなと思っています。そういうことができればいいなど。

中西： チラシと批評についてはあとでお答えします（といいながら、この時お答えできませんでした。チラシは 2500 部印刷しました。また、大阪アーツカウンシルのホームページやフェイスブック、twitter、で約一か月前から広報しました。批評については、充分ではないと思っています。）。時間がきましたので、中塚さんと最後の発言としたいと思います。

中塚： 大阪の場合はできるだけ敷居を下げる方向で今まで作品の活用・展示をしてきております。先ほど、アートツアーのお話がありました。アートツアー自体は私もいくらでもやりますが、誰が主催になるかと。大阪府が主催であれば内部で調整をする必要がある。どなたかが企画していただければ私はいつでもお伺いしたいと考えています。場所によっては建物の内部に入る場合がありますので、ツアーに適さない場所もあるかもしれませんが。パブリックな部分で展示しているのが大半ですので、アートツアーを開催するのも機会があればやろうと思っております。



会場風景

中西： 最後にひとことずつお話いただいて終わりたいと思います。

山中： アーツカウンシルの委員としては、2部のみなさんのお話で大阪の美術の流れがわかったのが参考になりました。歴史は繰り返されるというか、定期的に変化が起きているので今後も注目していきたいと思いました。

木坂： 千島財団は民間の財団ですが、民ができること、公でできること、両方を合わせてできることをこれからも考えていきたいと思えます。ありがとうございました。

後藤： アートがメインテーマですが、実はいろんなレイヤーの話があるイベントで、なかなかない機会だったと思います。今後もこういった企画が継続していけばと思います。

小吹： 僕はライターという立場なので、インディペンデントで動いている立場で言わせていただくと、結局それぞれ、あなた自身がどう動くかですと。周りがどうなろうが関係なく。とだけ言っておきたいなと思えます。

ラオ： 私は大阪のアートシーンは詳しくないですが、今日はいろいろ勉強になりました。自分でやっている仕事にもかかわる、参考になるイベントでした。

菅谷： 宣伝が少ないとお叱りを受けたので宣伝します。3月14-15日だったかな。まだ正式発表していませんが、美術館のイベントをやります。一つはコレクションについて語るということ。もう一つは、VIや建築がどんどん形になってきていますので、その報告などをしたいと思っています。フライングぎみですが、積極的に宣伝しようということで。もう少ししたらホームページにアップされますので、みていただけたらと。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

中塚： 一口に「美術 / アート」と言っても様々で、いろんなものがありますので一概には言えないと思います。それを扱う、つきあう人の立場も状況も様々にあるし、考え方も千差万別だと思います。でもそれぞれにみんな美術・アートに関心を持って、それに関わりたいと思っている人たちばかりだと思いますので、それぞれの立場で自分の信じるところに向かって頑張っていくしかないかなと思っています。

宮本： 日本現代美術振興協会も民間のギャラリーが母体となっています。ある意味中間的な集団です。そういう強みを生かして、大阪や関西の文化振興に関わっていけたらなと思っています。公共、共生、一般の人たちもつなぐような中間的な立場でいければなと改めて思いました。締まりが悪くて恐縮ですが、大阪市の文化行政の方針を今一度知る機会が欲しいなというのも改めて思いました。

中西： ありがとうございます。今日のタイトルは【大阪から「美術 / アート」を拓く】としました。ひらくというのは「open」の開くではなくて、手へんに石の「拓く」です。北海道の開拓の話も出ました。みなさん一人一人がやっていく中でつながってできるものがあるんじゃないか、その中で大阪府・大阪市の施策を知りたいという意見もあります。これを引き続き、何らかの機会につなげていくというのが今日のミッションだと思っています。みなさん、お手元にアンケートがありますのでご記入をお願いします。本日はありがとうございました。

4.参加者アンケート

4-1 アンケートについて

事業実施日：2020年1月25日（土）

参加者数：60名

アンケート実施日：2019年1月25日（日）～30日（木）

アンケート方法：当日配布の紙ベース及びウェブ回答

回収数：28件（うち紙26件、web回答2件）

※アンケート用紙添付（次ページ）

(2020年1月25日)

「第2回 大阪芸術文化交流シンポジウム」ご来場者アンケート

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。
今後の参考にいたしますので、アンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。
このアンケートはお手持ちのスマホでお答えいただくことも可能です。



スマホ回答で回答いただいた方はこちらにチェックをいれてください→

(問1) 年齢 10代以下 / 20代 / 30代 / 40代 / 50代 / 60代 / 70代以上

(問2) お住まい 大阪市 / 大阪市以外の府内 / その他大阪府外 ()

(問3) 今回のイベントを何でお知りになりましたか？

チラシ / 新聞 / テレビ・ラジオ / ウェブサイト・SNS / 友人・知人 / 関係者 / 偶然訪れた
その他 ()

(問4) あなたは表現活動をしていますか？プロアマ問いません。 はい / いいえ

(問5) (問4)で「はい」と答えた方は、該当するジャンルを以下から選り〇をつけてください。

・美術、音楽、演劇、舞踊、古典芸能、大衆芸能、工芸、文芸、その他 ()

(問6) 2020年1月現在の大阪の芸術文化の環境について、あなたの意見を教えてください。

創作環境 (満足、やや満足、普通、やや不満、不満、わからない)

発表場所 (満足、やや満足、普通、やや不満、不満、わからない)

鑑賞機会 (満足、やや満足、普通、やや不満、不満、わからない)

公的支援・助成金 (満足、やや満足、普通、やや不満、不満、わからない)

人的ネットワーク (満足、やや満足、普通、やや不満、不満、わからない)

(問7) (問6)でやや不満、不満と答えられた方について、具体的にどのようなことが教えてください。

[]

(問8) 本日の大阪芸術文化交流シンポジウムはいかがでしたか？

よい / どちらかといえばよい / 普通 / どちらかといえばよくない / よくない

(問9) 本日のシンポジウムについて、ご意見・ご感想がございましたらお聞かせください。なお、下の記入欄で足りなければ、用紙の裏にも自由にご記入ください。

[]

ご協力ありがとうございます。ご記入いただきました個人情報、上記目的以外では使用せず、当方にて厳重に管理いたします。

4-2 アンケート結果

問1 年齢 27 件の回答

10代未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
0	0	2	2	4	11	6	2

問2 どちらにお住まいですか。 28 件の回答

大阪市内	大阪市以外 外の大阪府	その他
13	10	5

※そのほかの内訳（兵庫県 4 名、和歌山県 1 名）

問3 今回のイベントを何でお知りになりましたか？（複数回答可） 28 件の回答

チラシ	新聞	テレビ・ラ ジオ	ウェブサイ ト・SNS	友人・知人	関係者	偶然
4	0	0	12	6	8	0

問4 あなたは表現活動をしていますか？プロアマ問いません。 28 件の回答

はい	いいえ
12	16

問5 上記ではいと答えた方は該当のジャンルを選んでください（複数回答可） 12 件の回答

美術	音楽	演劇	舞踊	古典芸能	大衆芸能	工芸	文芸	その他
6	3	1	1	0	1	0	1	3

※そのほかの内訳（写真 2 名 広告 1 名）

問 6 2020 年 1 月現在の大阪の芸術文化の環境について、あなたの意見を教えてください。26 名回答

<創作環境>

満足	やや満足	普通	やや不満	不満	わからない
0	2	5	7	4	8
	50代：2名	40代：2名 50代：2名 60代：1名	20代：1名 30代：1名 50代：2名 60代：2名 年齢未回答1名	50代：2名 60代：1名 70代以上：1名	20代：1名 30代：1名 40代：1名 50代：2名 60代：2名 70代以上：1名

<発表場所>

満足	やや満足	普通	やや不満	不満	わからない
0	1	8	7	4	6
	50代：1名	40代：2名 50代：3名 60代：3名	20代：1名 30代：1名 50代：1名 60代：3名 年齢未回答1名	50代：3名 70代以上：1名	20代：1名 30代：1名 40代：1名 50代：2名 70代以上：1名

<鑑賞機会>

満足	やや満足	普通	やや不満	不満	わからない
1	3	8	8	3	3
30代：1名	50代：1名 60代：1名 70代以上：1名	20代：1名 40代：2名 50代：3名 60代：2名	30代：1名 50代：3名 60代：3名 年齢未回答1名	50代：3名	20代：1名 40代：1名 70代以上：1名

<公的支援・助成金>

満足	やや満足	普通	やや不満	不満	わからない
0	0	3	4	8	11
		40代：1名 50代：2名	30代：1名 50代：1名 60代：1名 年齢未回答1名	20代：1名 50代：3名 60代：3名 70代以上：1名	20代：1名 30代：1名 40代：2名 50代：4名 60代：2名 70代以上：1名

<人的ネットワーク>

満足	やや満足	普通	やや不満	不満	わからない
1	1	5	4	4	11
30代：1名	70代以上：1名	40代：1名 50代：3名 60代：1名	50代：2名 60代：1名 年齢未回答1名	20代：1名 50代：1名 60代：2名	20代：1名 30代：1名 40代：2名 50代：4名 60代：2名 70代以上：1名

問7 上記でやや不満、不満と答えられた方について、具体的にどのようなことが教えてください。 13
回答

情報がうまく流通していないかも知れないと感じています。
・広く市民に支援活動が伝わっていない印象。 ・障害者アートに対する支援
宣伝広報にもっと力を！一般の人がもっと興味を持てるように
現代美術、新しく切り開く芸術の支援をもっと願います。 批評活動やシンポジウム、絵画の製作実演を企画してほしい。

大阪の企業、教育機関、美術館、NPOなどがよりきちんと連携するべきだと思いました。それぞれでがんばっているのですが、京都のようにそれらが組み合っていないのが残念です。
つながりがうまくとれるか自分の行動をどちらにいかせばいいか迷う（引っ越してきたので土地の情報がほしい）
大阪府・大阪市の支援に不満
各組織の横のつながりが少ない広がりが少ない
大阪という街が持っている作家（在住も含め）を社会の中できちんと位置づける環境が整っていない。最近のアートブームで代理店がイベント方式で催を行うことが多い。質の低下。
大阪にはあまり現代美術を展示できる ニュートラルな空間がない。enoco はあるが立地的にも設備的にも必ずしもめぐまれたものとは言えない。ただ千島のおうに民間企業が美術に積極的に関わってくれるようなことがあれば変わってくるかもしれないし、民間が交流しながら力をつけていって、行政に声をとどけていけたらと思いました
サポートが少ない
制作できる場所、美術館も少ないですね。 潜在的な物をニーズをつなげることで何か生まれるかも？
日本のアートに対する助成金は足りていないと思う。呼び込むための広報もあまりできていないように感じる。

問 8 大阪芸術文化交流シンポジウムはいかがでしたか？ 25 回答

よい	どちらかといえば いよい	普通	どちらかといえば よくない	よくない
11	9	5	0	0

問 9 本日のシンポジウムはいかがでしたか？ ご意見・ご感想がございましたらお聞かせください。 20 回答

大阪に引っ越してきて2～3週間なので、大阪の「美術/アート」シーンがよくわかった。舞台芸術の制作をしており、興味のある内容だったので、とても勉強になりました。様々な活動を知ったけど、大阪府・市のこれからの課題、地域問題などを知りたい、調べてみたいと思いました。(20代・表現活動をしている)

<p>万博に向けて、それ以降の未来へ向けて美術館が夢洲いできれば良いと思ってます。また想談させてくださいませ(50代・表現活動をしている)</p>
<p>4時間！！とはじめ思いましたが興味深く、あっという間でした。ありがとうございます。大阪のアートをもっと活性化していきたいです。(50代・表現活動をしていない)</p>
<p>大阪のアートについて知らないコトが多く、この様な機会がもっとあると嬉しいです。意識的に情報収集したいと思いました。継続してください。(60代・表現活動をしている)</p>
<p>いろいろ勉強になりました。(20代・表現活動をしている)</p>
<p>ありがとうございました。(30代・表現活動をしていない)</p>
<p>大変有意義なシンポ。もっと開催してほしい。 美術現場と批評を。(70代・表現活動をしている)</p>
<p>中塚先生の言われたとおりアートは千差万別だと思います。 自分の関わることによってアートを好きな人が増えるといいなと思いました。 いろいろな意見が聞けて有意義でした。ありがとうございました。 (60代・表現活動をしていない)</p>
<p>連続的に(年に一回)開催してほしいと思いました。(50代・表現活動をしている)</p>
<p>多方面の参加者の方々から たくさんの情報を得られてよかったです。 (50代・表現活動をしている)</p>
<p>助成についてももう少し(個人)詳しく個人的に聞きたいです。 (年齢未回答・表現活動をしている)</p>
<p>美術についてさまざまな切り口から見つめるよい機会になった。このようなシンポジウムはめずらしい。素人にもわかりやすい構成となっていた。大阪の美術を盛り上げるためにも どんどん開催してほしい。できれば、他の芸術ジャンルでもやってもらいたい。 (60代・表現活動をしていない)</p>
<p>アーティストが一人だったので、2、3人の話が聞きたかった。 (ラオさんの意見はとても良かった) 運営側の話に片寄り過ぎ ◎本物(世界に1つあるオリジナル作品ー美術館・ギャラリー等に足を運ぶこと) に出会える感激を改めて感じた=平和 (60代・表現活動をしていない)</p>
<p>シーズン・ラオ氏は良かった(60代・表現活動をしている)</p>
<p>とても貴重はお話しありがとうございました。(40代・表現活動をしていない)</p>

5. 資料

5-1 広報（チラシ）



OSAKA
ARTS
COUNCIL

第2回

大阪芸術文化交流シンポジウム

「美術／アート」を拓くひら

大阪から

2020.1/25 土曜日
13:00-17:00
（開場及び受付開始12:30）

I-siteなんば（大阪府立大学）
カンファレンスルーム
大阪市浪速区敷船東2丁目1番41号 南海なんば第1ビル2階

参加：80名（無料・予約者優先）
※障がい等により配慮を希望される方は、事前に問い合わせ先までご相談ください。

主催：大阪アーツカウンシル

※大阪アーツカウンシルは、大阪府市文化振興会連の厚会として、文化施策の評価、企画の提案に関する調査並びに文化に関する情報の収集及び分析を行っています。
このシンポジウムは、大阪アーツカウンシルの公開調査事業です。

大阪から「美術／アート」を拓く

総合司会

大阪アーツカウンシル統括責任者
中西美穂



13:00

第2回 大阪芸術文化交流シンポジウム

芸術に関わる人々の声聞き、交流し、新たに出会い、表現がひらかれることを目的として、大阪芸術文化交流シンポジウムを開催します。第2回目の今回は「美術／アート」に焦点をあてます。美術という言葉は近代以降に誕生しました。その美術の公的文化的支援の最も大きな形が美術館です。大阪では1936(昭和11)年に大阪市立美術館が開館して以来、複数の美術館施設等が設置され、多くの貴重な美術作品を収集・収集し、展覧会等を通して、現在に至るまで大阪という都市に「美術」を顕在化させてきました。一方で美術館を持たない大阪府は、大阪府立現代美術センター(1980-2011)を設置し、大阪トリエンナーレ(1990-2001)の開催を通して

大阪府20世紀美術コレクションを形成し、2000年以降に日本の市民権を得る「アートセンター」や「トリエンナーレ」といった言葉を先駆的に使った美術施策を行ってきました。これらの美術館やセンター等の存在は、多数の美術家や美術団体、愛好者が大阪で学び、暮らし、働き、活動してきたからこそこの結果であるといえるでしょう。本シンポジウムでは、そのような「美術」を「アート」とともに併記して同時代性を前提とし、大阪府市の美術施策の現在について聞くとともに、大阪にゆかりのある国際的に活動を展開する企画者らの発言も交え、大阪から「美術／アート」を拓く一つの機会にしたいと思っております。

「大阪府市補助金・助成金事業における「美術／アート」2018-19年度」

話題提供(登壇順)



インディペンデントキュレーター
大阪アーツカウンシル委員
山中俊広



大阪アーツカウンシル
アーツマネージャー
江藤まちこ



大阪アーツカウンシル
アーツマネージャー
野添貴恵

【参考I】2018年度の採択総数177件(内訳は大阪府芸術文化振興補助金17件、大阪府輝け子どもパフォーマー事業補助金16件、大阪市芸術活動振興事業助成金144件)うち特別22件)、2019年度の採択総数186件(内訳は大阪府芸術文化振興補助金16件、大阪府輝け子どもパフォーマー事業補助金18件、大阪市芸術活動振興事業助成金152件)うち特別28件)です。そのうち美術／アートに関わるものは38件です。

「美術コレクションから考える大阪」

司会

登壇者



フリーライター
小吹陸文



大阪中之島美術館学術調査室長
菅谷富夫



大阪府府民文化部
文化・スポーツ室 文化調査研究員
中塚宏行

【参考II】①大阪中之島美術館は大阪と世界の近現代美術をテーマとする美術館。大阪の実業家・山本俊次郎の収集作品約800点をはじめ約5700点の美術作品を所蔵。2021年度に大阪市北区中之島4丁目に開館予定。②大阪府20世紀美術コレクションは国内外の20世紀後半に生まれた美術作品を中心に約7900点を収蔵。現在、美術品の管理は大阪府立江之島文化芸術創造センターが行っている。

「大阪から「美術／アート」を拓く」

司会

登壇者(登壇順)

大阪アーツカウンシル
統括責任者
中西美穂



グラフィックデザイナー
近畿大学文芸学部准教授
後藤哲也



アーティスト
UNKNOWN ASIA 審査員
シーズン・ラオ



一般社団法人日本現代美術振興協会
事務局長
宮本典子



おおさか創造千鳥附団
事務局長
木坂葵

「大阪の美術を拓く」

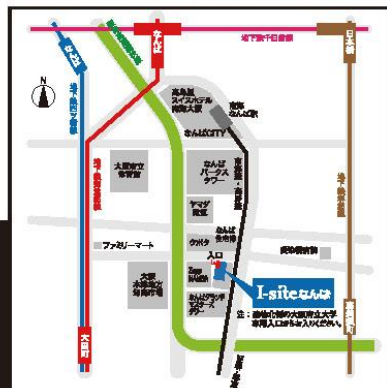
司会：中西美穂(大阪アーツカウンシル統括責任者)

登壇者(おおよそお順)

- 木坂葵(おおさか創造千鳥附団事務局長)
- 後藤哲也(グラフィックデザイナー、近畿大学文芸学部准教授)
- 小吹陸文(フリーライター)
- シーズン・ラオ(アーティスト、UNKNOWN ASIA 審査員)
- 菅谷富夫(大阪中之島美術館学術調査室長)
- 中塚宏行(大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化調査研究員)
- 宮本典子(一般社団法人日本現代美術振興協会事務局長)
- 山中俊広(大阪アーツカウンシル委員)

会場 I-site なんば(大阪府立大学)

大阪市浪速区泉津東2丁目1番41号 南海なんば第1ビル2階



予約方法(先着順)

「名前(ふりがな)」、「所属」、「電話番号」
「参加人数」を、
以下のメールアドレスあてに送付してください。
bunka@sbox.pref.osaka.lg.jp
(予約専用・令和2年1月23日(木)18時締切)

お問い合わせ

大阪アーツカウンシル事務局
(大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課)
電話：06-6210-9305(9:00-18:00)
※土日祝及び年末年始(令和元年12月30日～令和2年1月3日)を除く

5-2 当日配布資料

第2回 大阪芸術文化交流シンポジウム 大阪から「美術/アート」を拓く 第1号資料
大阪府市補助金・助成金事業における「美術/アート」2018-19年度 実施事業一覧

No.	種別	対象者の事業内容	団体名	事業名	会場	開催期間	特色
1	前・芸	美術・アート	一般社団法人タチオナ	店內つくるオンラインボク 2018	大阪商業大学、店内公民館、高川図書館	ワークショップ・2018年3月 コンサート・2018年3月25日(日)	1, 2, 4
2	前・芸	その他(複合型 市民協賛フェスティバル)	3NF実行委員会	ワークショップフェスティバル・ドアーズ 12th	大阪市立南区民センター、大阪市立芸術創造館、メビックホール、大阪府立江之子島文化芸術創造センター、大阪府立男女共同参画センター—南區部 クレオ大阪府	2018年7月22日(土)～7月29日(火)、8月3日(金)～4月5日(日)	4
3	前・子	美術・アート・その他	ユメハト実行委員会	ユメハトフェス 2018	豊都緑地野外音楽堂	2018年4月20日(月・祝)	1, 4
4	前・子	アート	豊都阿保プロフェクション・マッピング体験実行委員会	豊都阿保阿保プロフェクション・マッピング体験	豊都阿保立上とわわ小学校、豊都阿保公民館	作品制作:2018年5月～8月 作品発表:2018年8月25日(土)	1, 4
5	前・特例	ワークショップ	特定非営利活動法人こえとこよびこころの館	こえとこよびこころの館 2018	大阪府西成区各所、西成区民館、三條東、ガス・ハウスとカフェと観音堂、東島の館など	2018年4月1日(日)～2018年3月31日(日)	1, 2, 4
6	前・特例	美術展・総合芸術祭	7つの船実行委員会	入船	大阪府内各所	クルーズ日:2018年12月8日(土)、9日(日)、2019年2月22日(土)、23日(日)	1, 6
7	前・特例	美術展・シンポジウム	一般社団法人おひさか藤屋千鳥新聞	Open Storage 2018 -おひさか藤屋千鳥新聞-	MASK [MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA]	2018年10月6日(土)～6日(月・祝)、11月11日(日)	2
8	前・特例	美術展・総合芸術祭	アートエリア21	創造芸術祭vol.3「知・都市計画 ～そらうらうらするGTY～」	アートエリア21	2018年11月3日(土・祝)～2018年11月14日(月・祝)	2
9	前・特例	美術展・ワークショップ	旗屋 雄 ぎやまのりかこ	旗屋 雄 ぎやまのりかこ	旗屋 雄 ぎやまのりかこ	2018年6月29日(金)	4
10	前・特例	美術展・ワークショップ	山口 雄生	The Astrologer Who Fell Into A Well 展	OAG、高野寺	2018年8月8日(土)～22日(土)	3, 6
11	前・特例	総合芸術祭	みてアート実行委員会	みてアート・美術展芸術祭 2018	大阪府西成区民センター、大阪市立芸術創造館(もと数島橋)・スターニナル、2F南島芸術創造館の事務所、公共施設など	2018年11月1日(水)～5日(月)	1
12	前・特例	総合芸術祭	UNFORGOTTEN	Unforgotten 3rd International Art Festival	南園ZAZA	2018年11月10日(土)、11日(日)	3, 6
13	前・特例	美術展	アートスペース+ギャラリー あべのま	あべのま	アートスペース+ギャラリー あべのま	2018年11月17日(土)～2018年11月28日(土)	6
14	前・特例	美術展	井 真央	遠くを見る方法と平行する時間の流れ	FLAG STUDIO	2018年11月23日(金)～12月7日(金)	6
15	前・特例	美術展	ONLY CONNECT	ONLY CONNECT OSAKA	クリエイティブセンター大阪	2018年12月22日(土)～2月17日(日)	3, 6
16	前・芸	アート	一般社団法人タチオナ	店内つくるオンラインボク 2018	大阪商業大学	ワークショップ・2018年6月中旬～8月中旬、6月～2020年3月 コンサート・2018年8月31日(土)	1, 2, 4
17	前・芸	その他(複合型 市民協賛フェスティバル)	3NF実行委員会	ワークショップフェスティバル・ドアーズ 13th	大阪市立南区民センター、大阪市立芸術創造館、メビックホール、大阪府立江之子島文化芸術創造センター、大阪府立男女共同参画センター—南區部 クレオ大阪府	2018年7月27日(土)～7月30日(火)、8月3日(土)、4日(日)	4
18	前・芸	伝統芸術・アート	公益財団法人山本美術館	新作展「水の輪」(山本美術館山本展)	津堂城山古楽演奏ステージ(藤井寺町)	2018年8月18日(月・祝)	2
19	前・子	アート	豊都阿保プロフェクション・マッピング体験実行委員会	豊都阿保阿保プロフェクション・マッピング体験	豊都阿保立上とわわ小学校、豊都阿保公民館	作品制作:2018年5月～8月 作品発表:2018年8月24日(土)	1, 4
20	前・特例	ワークショップ	特定非営利活動法人こえとこよびこころの館	こえとこよびこころの館 2018	大阪府西成区各所	2018年4月1日(月)～12月31日(火)	1, 2, 4
21	前・特例	芸術祭	Responding International Performance Art Festival and Meeting	第2回 Responding International Performance Art Festival and Meeting (R2)	ROYA、大阪府大正区南港地域	2018年8月28日(金)～30日(日)	3
22	前・特例	芸術祭	みてアート実行委員会	みてアート・美術展芸術祭 2018	大阪府西成区民センター、大阪市立芸術創造館(もと数島橋)・スターニナル、2F南島芸術創造館の事務所、公共施設など	2018年11月1日(水)～5日(火)	1
23	前・特例	アートプロジェクト	ひといろプロジェクト	HOSPITAL ART is Gallery -I (病院のあひだもーっとにつくみかんなで見る)	大阪府立江之子島文化芸術創造センター	2018年11月12日(火)～17日(日)	1
24	前・特例	美術展・シンポジウム	MASH(大阪)	コミュニケーションを促進した都市アート(ストリート・クリエイター作品発表機会)と対面しよ。新たなREV/再発見都市生活環境改善事業「UJI PROJECT-ART x REV CONCEPTION & DIALOGUE」	コミュニケーションdata	2018年12月18日(水)～2020年3月(予定)	1
25	前・特例	芸術祭	アートエリア21運営実行委員会	サーチプロジェクト vol.3「クリエイティブ・アイランド(うらやまの島)～文化の芸術島としての中之島芸術プロジェクト～」	アートエリア21	2020年1月24日(金)～2月22日(日)	2
26	前・特例	アーカイブ	3NF実行委員会	ワークショップ「ドアーズ」ドアーズ・アーカイブ	Webサイト、印刷物	2018年度中制作・公開(予定)	1, 4
27	前・特例	展覧会	株式会社 七影	旗屋真実とまうまキネマたち(旗屋真)	NANASAI ARCHIVES 旗	2018年4月1日(月)～8月10日(金)	5
28	前・特例	美術展・ワークショップ	アートコネクト実行委員会	大阪商業アート 2018	南園部 精四～津南エリア	2018年12月15日(水)～18日(土)	1
29	前・特例	展覧会	インスタ展	HOMWORKS 2018	ITAHAMA N Gallery	2018年8月21日(土)～9月1日(日)	5
30	前・特例	展覧会	国際交流館実行委員会	高野真由、フェリカ・ルッフィ展	LADS GALLERY	2018年8月10日(火)～22日(日)	3
31	前・特例	展覧会	わいせいの企画	和紙人形の世界展	旗野O.Sのまちギャラリー	2018年8月25日(水)～30日(月)	6
32	前・特例	展覧会	特定非営利活動法人キヤズ	ハンブルク・大阪友好都市提携20周年記念大阪展「WAVES -FRIGIDANCES (波・高野真)」	OAG	2018年10月12日(土)～11月2日(土)、11月18日(土)～20日(土)	2, 3
33	前・特例	展覧会	ALTEMY	Multiple Perception-豊島の新しい芸術家の提示-(13歳以下の若手画家による豊島の展覧会2018)出品作品	グランフロント大阪 うめきたSHPホール	2018年10月18日(金)～20日(日)	5
34	前・特例	展覧会	大阪真実展「今更」実行委員会	大阪真実展「今更(もうこう)」	浄土宗真興院	2018年10月20日(水)～20日(月)	6
35	前・特例	展覧会	一般社団法人日本現代美術展覧会協会	ちちとまの現代アート	北野堂信堂、野島屋敷設計事務所本社ビル、南島芸術創造センター大阪本社ビル	2018年10月25日(土)～27日(日)	2
36	前・特例	展覧会	パブリケーション	PAVECTION もやいなたちも展	Shy SHENSO BLDG. 2Fレンタルスペース	2018年11月22日(金)～24日(日)	5
37	前・特例	芸術祭	Far East Audio Visual Socialization (FEAVS)	WFT 18/20 in Osaka	クリエイティブセンター大阪	2018年11月22日(金)～12月1日(日)	6
38	前・特例	公演・展覧会	おひさか藤屋千鳥	おひさか藤屋千鳥展H1 旗屋(かっせん)	ROYA	2018年12月7日(土)～22日(日)	6
39	前・特例	展覧会	音楽と演劇の年賀状展	音楽と演劇の年賀状展1	北野 FOLK old book store	2020年1月11日(土)～19日(日)	1

【補助・助成金の募集】	【特色(「美術/アート」事業)の募集】
前・芸……大阪府芸術文化振興補助金	1 ……通信・コミュニケーションに特化した活動
前・子……「掛け」子ども/フォーマー等募集補助金	2 ……大阪のアート振興による活動
前・特例……大阪府芸術活動振興事業補助金(特例)	3 ……国際交流を軸とした活動
前・一級……大阪府芸術活動振興事業補助金(一級)	4 ……ワークショップ形式を軸とした活動
	5 ……デザイン分野による活動
	6 ……アーティストによる活動

調査資料提供期間:2020年1月19日
作成:2020年1月25日 大阪アーツカウンシル(山手 俊広、江藤 まさこ、野島 真実)
※許可の無い転載・コピーは禁止します。(C)大阪アーツカウンシル 2020

第2回 大阪芸術文化交流シンポジウム

～大阪から「美術/アート」を拓く～-実施（調査）報告書

調査企画：大阪アーツカウンシル

発行：大阪府・大阪市

委託：大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課

受託：株式会社 cept